高見（こうみ）遺跡

一般国道256号道路改良事業に伴う
緊急発掘調査報告書

1998

岐阜県

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

岐阜県洞戸村は、中央に板取川の清流、背後に高賀山を始めとする山々が控える美しい村です。春は鮎釣り、夏は川遊び、秋は紅葉と四季にわたって豊かな自然を利用した観光資源にも恵まれています。国道256号道路は、こうした観光客を迎え入れるため重要な道路であり、また村の日々の生活を支える主要な道路でもあります。今回高見地区内においてこの国道の拡幅工事を行うことになり、それに伴い以前から知られていた高見遺跡の一部を発掘調査することになりました。

その結果、狭い調査区ながら縄文時代中期から後期にかけての住居跡や土坑、2本の河川跡、そして縄文時代後期の遺物を多く含む土砂崩れの痕跡を検出しました。また12世紀から13世紀にかけての柱穴や土坑を検出し、現在に続く高見遺跡周辺の歴史的変遷の一端を明らかにすることが出来ました。今後、洞戸村及び奥美濃地方の歴史を考える上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査及び報告書刊行にあたり行うにあたり協力をいただいた地元の関係各位、並びに関係諸機関の皆様には厚く御礼を申し上げます。

平成10年3月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　篠　田　幸　男

例　　言

1．本書は、武儀郡洞戸村大字奥洞戸字田中森に所在する高見遺跡（県遺跡番号01192）の発掘調査報告書である。
2．本調査は、一般国道256号道路改良事業に伴うものである。岐阜県美濃土木事務所より岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが調査を実施した。
3．発掘調査は平成９年度に実施し、長谷川幸志が担当した。
4．本書に掲載した遺物の実測は次の者が行った。
　丹羽　香・丹羽和代・長谷川幸志
5．実測図等のトレースは次の者が行った。
　高井昌子・渡辺由起
6．遺物の写真撮影はスタジオ・ベガに委託して実施した。
7．本書の執筆は第５章第２節の中近世遺物について小野木学が、その他を長谷川幸志が担当した。また編集は長谷川幸志が行った。
8．水準測量・航空写真は（株）イビソクに委託して行った。
9．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の方々の参加、協力を得た。
・補助調査員
　田中旨穂
・発掘調査員
　後藤俊信・三島栄一・小林善正・林　利成・野村真富・田口睦子・野村敏子
・整理作業員
　高井昌子・玉置順子・渡辺真紀子・小島和子・丹羽　香・丹羽和代・渡辺由起
10．調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1．出土遺物の実測図の縮尺は、土器は1/3、石器は2/3、1/2、1/3のいずれかである。
2．遺物番号は１番から通番を付した。
3．石器の実測図の図中、スクリーントーンの部分は磨耗痕を示す。
4．遺構の略号は下記の通り用いた。
　住居・竪穴状遺構……SB
　集石……SI
　土坑……SK
　柱穴……P
　自然流路……NR
5．遺構の番号は発掘時の番号を基本とする。
6．発掘及び整理作業に用いたグリッドは北西隅の名称を用いる。
7．本報告書で使用した土層及び土器の色調は、財団法人日本色彩研究所1993『標準土色帖』を基準としている。

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　遺跡周辺の地形・環境……3
　第２節　周辺の遺跡……3
第Ⅲ章　基本層序……4
第Ⅳ章　縄文時代遺物の分類……7
　第１節　土器の分類……7
　第２節　石器の分類……8
第Ⅴ章　遺構と遺物……10
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……10
　第２節　中世の遺構と遺物……35
第Ⅵ章　まとめ……37
　第１節　高見遺跡出土の縄文土器……37
　第２節　高見遺跡の様相……38
参考文献

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第２図　調査範囲図……2
第３図　遺構配置図……5
第４図　基本層序柱状図……5
第５図　SB１実測図……10
第６図　SB１周辺の遺物散布図……11
第７図　SB１出土土器（１）……12
第８図　SB１出土土器（２）……13
第９図　SB１出土石器……13
第10図　SB２実測図……14
第11図　SB２出土土器……15
第12図　SB２出土石器……16
第13図　SB２出土石皿……17
第14図　SK26・28実測図……18
第15図　SK26・28出土土器……19
第16図　SB26・28出土石器……20
第17図　SB３、SK８・15、Ｐ６・11実測図…21
第18図　縄文時代の柱穴・土坑出土遺物……21
第19図　SI１・２実測図……22
第20図　SI１出土遺物……22
第21図　遺物集中地点層位……23
第22図　遺物集中地点出土土器（１）……25
第23図　遺物集中地点出土土器（２）……27
第24図　遺物集中地点出土土器（３）……29
第25図　遺物集中地点出土石器（１）……31
第26図　遺物集中地点出土石器（２）……32
第27図　遺物集中地点出土石器（３）……33
第28図　遺物集中地点出土石器（４）……34
第29図　SK13・14・17・18・20・23実測図……35
第30図　中世遺構出土遺物……36

表　目　次

第１表　中世遺構一覧表……36
第２表　縄文土器観察表……39
第３表　石鏃観察表……42
第４表　削器・掻器観察表……42
第５表　石錘観察表……42
第６表　石核観察表……42
第７表　楔形石器観察表……42
第８表　石錐観察表……42
第９表　磨製石斧観察表……42
第10表　凹石観察表……42
第11表　打製石斧観察表……43
第12表　叩き石・敲き石・磨石観察表……43

図 版 目 次

図版1　遺構図版（1）
図版2　遺構図版（2）
図版3　遺構図版（3）
図版4　遺物図版（1）
図版5　遺物図版（2）
図版6　遺物図版（3）
図版7　遺物図版（4）
図版8　遺物図版（5）

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

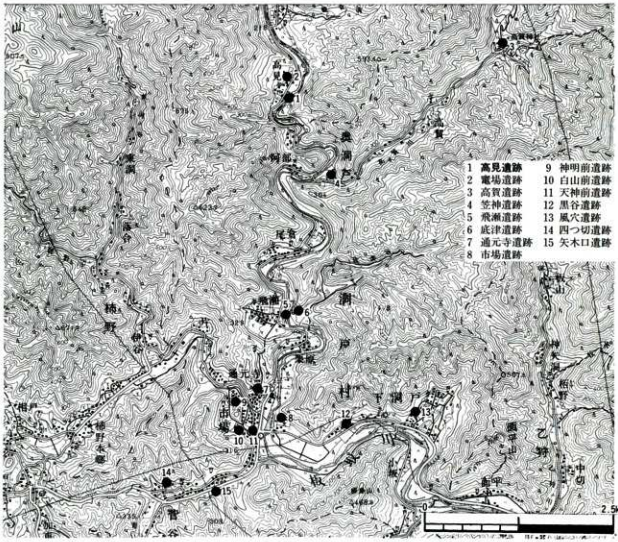
本遺跡は、武儀郡洞戸村高見地区に所在する。当地区の中央には、岐阜市を起点とし長野県に至る国道256号線が南北に貫き、生活・観光道路として重要な役割を果たしている。しかし集落地区内において、集落の立地の関係上道路幅が狭く、国道でありながら対向車線が無い状態であった。そのため美濃土木事務所は、道路を2車線化するための工事を計画し、工事計画等が岐阜県教育委員会に示された。この拡幅部分が、周知の遺跡である高見遺跡（県遺跡番号01192）の範囲に含まれるため、岐阜県教育委員会は調査が必要と判断し、財団法人岐阜県文化財保護センターが委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

第2節　発掘調査の経過

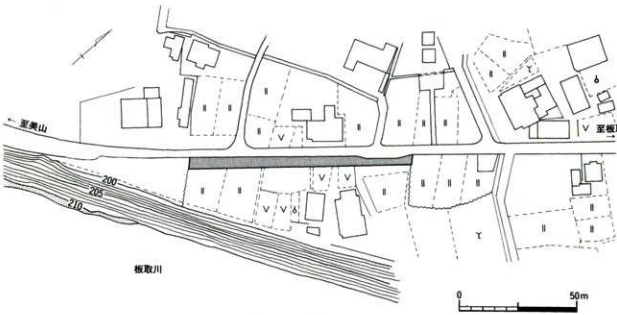
今回の調査は、9月の段階から準備を行い、10月から本格的な調査を開始した。調査面積は約240㎡である。道路拡幅部分のみの事前調査であるため、道路周辺の人家への影響を考慮に入れつつ、段階的な掘削を行った。まず調査区の北端であるバスの停留所付近の宅地の盛り土を、重機によって除去し近現代の水田面まで掘り下げた。ここからは中世の水田と縄文時代後期の自然流路を検出した。また調査区南部の盛り土を除去したが、大部分が地山以下まで攪乱されており、SB2以外の遺構が検出されなかったため、早い段階で埋め戻した。次に中央部の畑地の掘削を行った。この際調査区東にある人家への進入路を確保するため、道路部分は最後に調査することとし、畑部分のみからの調査となった。ここからは、縄文時代後期の遺構の他、中世の柱穴、土坑を検出している。なお、グリッドについては、調査区が細長く磁北を基準とした設定は困難であったため、調査区の方向を基準とした1辺4mで設定した。

10月末までの調査により以上の部分は順調に検出を終えたが、畑地の南の調査区内に建つ民家の取り壊し作業が11月の初旬に行われたため、当部分についてはこの時点からの調査となった。表土掘削は重機で行い、中世の土坑・柱穴などを確認したが、大部分は地山まで攪乱がおよんでいた。また民家への進入路部分の調査もこの頃から行い、縄文時代の遺構を検出した。その後ほぼ掘削を終え、11月下旬に航空写真の撮影を行った。

11月に入ると天候が崩れ寒い日々が続くようになり、作業が大幅に遅れた。また調査区北から検出した自然流路の岸の部分から、遺物を大量に含む層が確認されたため、11月下旬に予定していた調査終了も、12月上旬にまでずれ込むこととなった。12月5日久しぶりの晴天の中ようやく調査を終了した。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　調査範囲図

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡周辺の地形・環境

洞戸村は美濃高地の最も奥に位置し、村の中心地である市場周辺などに見られる河川堆積による平地を除けば、ほぼ全域が急峻な山地で占められる。その中を縫うように、福井県との県境をなす越美山脈より流れ出る板取川が、村の中央を湾曲しながら南下し、市場周辺で東に流れを変えた後長良川に合流する。

遺跡の所在する高見地区は、板取川と高賀山脈に端を発す高賀川との合流点よりさらに北上した、板取村との境に位置する。板取川流域には、川が運ぶ堆積物によって形成された河岸段丘が多く存在しているが、高見地区はその中でも比較的広い平坦面に立地する。板取川は、この地区を挟んで大きく流れを変えており、堆積物を残し東側へ流れを変えたと推察される。この平坦面は、西側の山裾に向かって緩斜面を形成しており、山からの崩落による堆積が何度となくあったことが推察される。今回検出された一括堆積層も、こうした崩落に起因するものと考えられる。この平坦面の東端は板取川によって大きく開析されて急な崖になっており、河川とは約10mの比高差がある。

高見遺跡は、高見集落のほぼ南端に位置しする。板取川とも近く、山裾からの緩斜面が平坦面に変わる比較的なだらかな部分に立地している。現在は水田・宅地・畑地として利用されており、標高は210～212mを計る。遺跡付近の山裾からは現在でも湧水が見られ、また調査によって検出された河川跡からも当時水の便のよい居住に適した土地だったと推定される。

第2節　周辺の遺跡（第1図）

洞戸村には現在16ヶ所の遺跡が知られている。そのほとんどは板取川や高賀川の流域に発達した河岸段丘上に立地している。これらのほとんどが旧石器～縄文時代の遺跡であり、縄文時代では早期後半から晩期にかけての資料が見られる。近年行われた調査では、1987・87年に小学校建設に伴い市場遺跡が、1994年には林道開設工事に伴い底津遺跡川向林道地点が、また1993・1994年には国道256号道路改良工事に伴い底津遺跡・飛瀬遺跡の調査がそれぞれ行われている。

奥洞戸地区周辺では、竜場遺跡・笠神遺跡・高賀遺跡といった遺跡が知られている。笠神遺跡は板取川と高賀川が合流する地点の西向きの緩斜面に所在する。1968年に洞戸小学校職員・児童によって調査が行われている。詳しい出土状況は不明であるが、後期前葉から中葉にかけての遺物が出土している。竜場遺跡は、高見遺跡と同じ段丘上の北側に所在し石鏃等が採集されている。高賀遺跡は高賀川の流れる高賀谷の奥、高賀神社のあるやや開けた場所に立地している。早期の遺跡であり、多くの石器が採集されている。なお縄文時代以降の遺跡については、奥洞戸地区においては確認されていなかったが、高見遺跡で検出されたことから今後発見される可能性があると思われる。

第Ⅲ章　基　本　層　序（第4図）

調査区は大きく現状によりⅠ水田（A1～8）、Ⅱ宅地（A9～19）、Ⅲ旧水田（A19～23）の3区に分けられる。Ⅰは、ほ場整備のさいに地山まで攪乱を受けており、SB2を除き遺構は残存していない。Ⅱは、さらに旧宅地（Ⅱa）と畑地（Ⅱb）に分けられる。Ⅱaに関しては、地山まで攪乱を受けておりほとんど遺構が残存しておらず、Ⅱbに関しても耕作により包含層がかなり掘削を受けていた。Ⅲは現代水田であるが、現在は、盛り土され住宅が建っている。下層には中世の水田が残存しており、縄文時代の層も比較的良好な残存状態を示す。以下にそれぞれの地区の層位的な対応関係を記す。

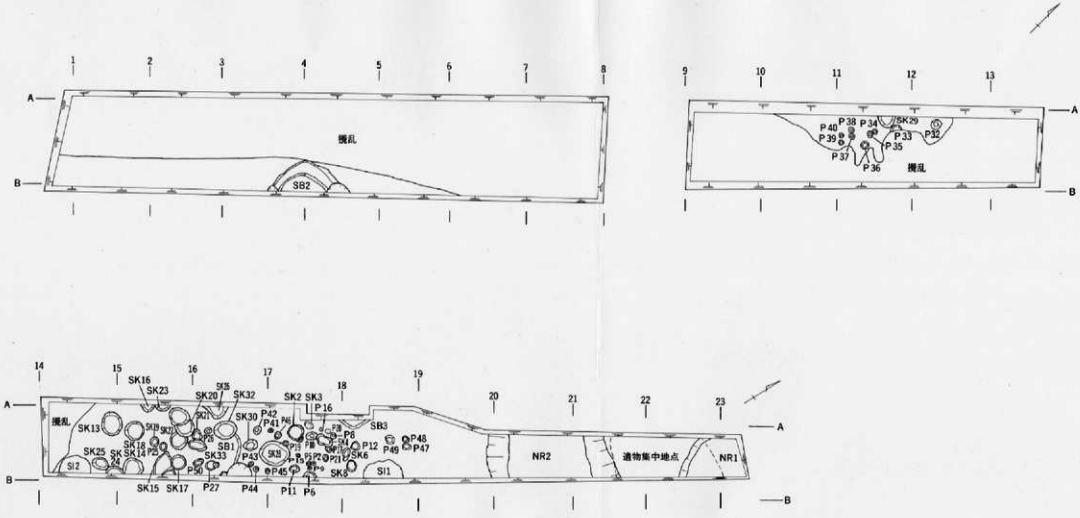
0層　盛土層。ⅠとⅡa、Ⅲにみられる。ごく最近のものである。

1層　耕作土層。それぞれの地区の1層が対応する。畑や水田の耕作土であり、1—⑤は現代水田の敷土になる。Ⅲの1—⑥層は中世の水田面と思われる。藤沢編年の5～6型式にあたる荒肌手山茶碗が出土しており、これはⅡの中世遺構の年代と一致することから、それらが同時期に存在していた可能性が高い。Ⅱbの1—④層が中世の包含層の可能性があるが、ほとんど同質の土質のため、境は不明瞭である。1—②層は1—③層と似た土が地山直上まで入り込んでいる他、付近では見られない赤褐色の粒子を大量に含んでいることから客土と判断した。縄文時代中期前葉・後期前葉、中世～近現代にかけての遺物が出土している。

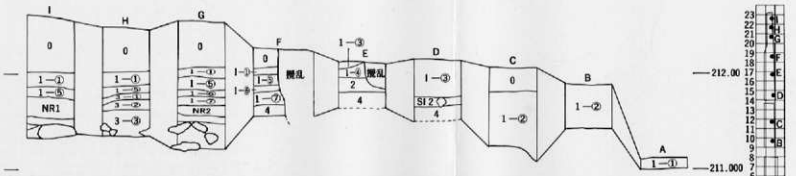
2層　縄文時代の遺物包含層。Ⅱb・Ⅲの2層がこれに対応する。Ⅱの2層は縄文時代中期前葉・後期前葉の遺物が含まれるが、1層の耕作による攪乱のため場所によって残存状態が異なるため、時期的な位置付けは困難である。しかしSB1、SK26・28はこの面の上から、掘り込まれていることを確認していることから、後期初頭～前葉の包含層は1層によって削平されており、2層はそれ以前の包含層であると考えるのが妥当であろう。Ⅲの2—①・②層は、Ⅱの2層に含まれる遺物よりもやや新しい遺物を含んでおり、SB1等が存在した時期には、まだ堆積していなかったと考えられる。当層は、大量の礫をともないその間からも遺物が検出されることや、ほとんど均質な土質で厚く堆積していること、また遺物もほとんどローリングをうけていない状況から、土砂崩れや土石流などによって山側から押し流されてきた一括堆積の可能性が高い。また遺物がほぼ後期前葉後半のもので占められる状況から、上流の遺物包含層を削り取ってここまで運ばれてきた状況が考えられる。なお3層については後章で詳しく述べる。

4層　2層と地山の遷移層であり、遺物は含まない。倒木痕が多く存在する。Ⅰから検出したSB2が、おそらくこの層の上面から掘り込まれていると思われるが、地山まで削平されているため確認できなかった。Ⅱにも若干この層から始まる遺構を確認している。

5層　地山。黄褐色の砂層と段丘礫からなる。地山のラインの観察から南に向かってなだらかに下っていく地形であったことが予想される。



第3図　遺構配置図



	時期	I (A1～9)	II (A10～13)	II b (A14～20)	III (A21～23)
近現代		0　盛土（砕石等）			
中世	12～13C	1－①現代水田　10YR4/1　褐灰色シルト	1－②浜土　10Y2/1　黒色砂層（ややしまり良し、赤褐色の粒子混）	1－③地畑耕作土　10YR3/2　黒褐色砂層（不均質な砂粒、しまり悪い）	1－①現代水田　10YR4/1　褐灰色シルト
					1－②敷土　7.5YR3/2　黒褐色シルト
				1－④中世遺構面小？　10YR3/2　黒褐色砂層（しまりやや悪い、炭混）	1－⑤中世水田　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色
縄文時代	後期前葉後半～ 後期初頭～前葉前半 中期前葉～末				NR 埋土第21図参照 3－①a 包含層　10YR3/3　暗褐色シルト 3－①b 包含層　7.5YR3/1　黒褐色シルト 3－②　包含層　10YR3/1　黒褐色砂層（A地火のレキ多量に含む）
				2　包含層　10YR3/1　黒褐色シルト（砂作により撹乱される）	
			4　10YR3/3　暗褐色砂層（やや細かい粒子、しまり良し）		
		5　地山　10YR5/6　黄褐色砂層（粒子の粗い砂）			

第4図　基本層序柱状図

第Ⅳ章　縄文時代遺物の分類

第1節　土器の分類

今回の発掘では、縄文時代中期前葉・末葉、後期前葉の時期の土器が出土している。その多くは残存状態の悪い包含層からではなく、遺構等から集中して出土したものである。遺構に関しても一括性が高いとはいえないが、型式学的にはまとまった時期の資料と考えられる。ここでは出土土器を、器形・紋様・残存部位等による属性を用いて一括した分類を行い、それぞれの地点間との比較を行う事で遺跡の性格を明らかにする一助としたい。なお器形については細片が多いため、明確に区分されるもののみ分類を行い、その他は土器群として扱っている。

Ⅰ群　中期に属する土器

1類　中期初頭～前葉に属する土器を一括する

2類　隆帯紋を主紋様とする土器群

3類　沈線紋を主紋様とする土器群

4類　その他の土器群

5類　2～4類のものと思われる底部破片を一括する

Ⅱ群　後期に属する土器

1類　外傾または外反する口縁部が、口縁部から頸部にかけて無紋帯となる土器群

a種　口縁部から頸部にかけて無文となり、胴部紋様帯との境に横位の沈線を1条付す土器の内、胴部に2条沈線によって斜方志向の紋様を描く土器。

b種　1類a種に似た器形と紋様構成をもつが、胴部紋様に3条沈線を用いる土器。

c種　1類中、口唇部部に沈線を施す口縁部破片。

d種　c種に類似するが、口唇部が外側に拡張される口縁部破片。

2類　口縁部が緩く内湾する器形をもち、胴部を2条沈線によるクランク状の紋様で区切る紋様構成をもつ土器群

3類　口唇部を肥厚・拡張し、沈線紋を施す土器群

a種　口縁部に幅広の肥厚・拡張を施し、縦位の沈線紋を施す土器。

b種　口縁部をL字型に屈曲させ、多重沈線による紋様を描く土器。

c種　口縁部に沈線紋を施すが、頸部無文帯との差が明確でない土器。

d種　強く外傾・外反する口縁部をもち、口縁部をT字型に拡張して沈線・縄文を施す土器。波状口縁になるものもある。

e種　本類に属する土器の内、沈線が凹線状になる土器。

4類　磨消縄文による紋様をもつ土器群

a種　やや幅の狭い磨消縄文の連結によるモチーフをもつ土器。

b種　その他の磨消縄文をもつ土器。

5類　沈線・縄文帯による三角形状のモチーフをもつ土器群

6類　縄文帯を多段化し、口縁部に紋様を集約させる土器群

a種　直線的な口縁部をもつ土器。

b種　内湾する口縁部をもつ土器。

7類　渦状・多条沈線による紋様をもつ土器群

a種　沈線紋による渦状のモチーフをもつが、無紋部を多くもつ土器。

b種　渦状・多条の沈線を密に施す土器。内傾する口縁部が特徴。

c種　密な沈線紋が、横位志向になる土器。

8類　微隆線及び隆帯による施紋をもつ土器を一括する

a種　断面三角形になる微隆線をもつ土器。

b種　鎮状隆帯をもつ土器。

c種　横位有刻隆帯をもつ土器。

9類　押引沈線をもつ土器群

10類　無文の強く外反する口縁部もつ土器群

a種　口唇部に縄文を施す土器群。

b種　口唇部調整をしない土器群。

11類　深鉢以外の器種を一括する

12類　粗製深鉢を一括する

a種　無文

b種　縄紋

c種　条線文

13類　底部破片を一括する

第2節　石器の分類

出土状況は、縄文土器と同様である。以下に、本文で用いた石器の種類と分類の基準について述べる。

石鏃　今回の発掘では、有茎鏃は出土していない。そのため凹基・平基・円基の基部形態と先端部の形態の組み合わせで分類する。

先端形態

1類　三角形となって尖るもの。

2類　三角形となるが、肩をもち有段となるもの。

3類　丸みをもつもの。

基部形態

A類　凹基の内、抉り部が「く」字型を呈すもの。

B類　凹基の内、抉り部が半円形を呈し浅いもの。

C類　凹基の内、抉り部が深く、丸みをもつもの。

D類　平基になるもの

E類　円基になるもの

楔形石器　相対する方向からの衝撃による剥離痕が、対照的な位置にみられる石器を楔形石器とした。

削器・掻器　剥片の側縁部を連続して加工し、刃部とする石器を削器、その刃部の角度が急なものを掻器とした。縦長の剥片か横長の剥片を用いるかで分類する。

石錐　本来の分類で用いられる石錐は出土していない。極小の縦長剥片の両側縁に加工のみられる石器の名称として用いる。1点のみ出土している。

RF・UF　2次加工のある剥片を RF、使用痕のある剥片を UF とする。

ヘラ型石器　縦長剥片の両側縁を折り取り、長軸方向の一端に刃部を作出した石器[1]。本遺跡からは1点のみ出土している。

石核　素材・打面・作業面を基準に分類する[2]。

1類　幅広で厚手の剥片を用いて、節理面及び周縁の平坦面から1方向に剥離作業を行うもの。当遺跡出土のこのタイプの石核は、1～2回の剥離作業を行っているのみである。

2類　1類と同様な素材を用いるが、平坦面のない部分については背面からの加撃により剥片を作出するもの。打面転移が頻繁に行われる。

3類　2類の内、剥離作業が両面におよぶもの。

4類　分割礫を用いて、平坦面及び背面からの加撃による剥離作業を行うもの。

打製石斧　形態分類は特に行わないが、特殊な形状をもつものについてのみ記述する。自然面と刃部加工の有無を主要な観察の対象とする。

石錘　切れ目石錘と打ち欠き石錘とがある。打欠部と切れ目部間の最短距離を計測した。

敲き石・叩き石・磨石　敲き石はアバタ状の敲打痕が側縁にみられるもの、叩き石は敲打による大きな剥離痕がみられるものとした[3]。また敲打面が有るものの中にも磨り面をもつものが有り、表中では分離せずに扱う。

凹み石　平坦部に明確な凹みがみられるもののみを凹石としたが、アバタ状の敲打痕があるものは存在している。

第Ⅴ章　遺構と遺物

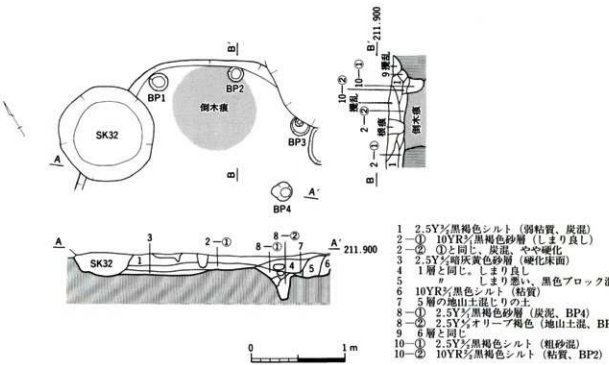
第1節　縄文時代の遺構と遺物

今回の発掘では、縄文時代の遺構として住居跡2軒、竪穴状遺構1基、集石2基、土坑4基、柱穴2基を検出した。以下に詳細を示す。

住居跡

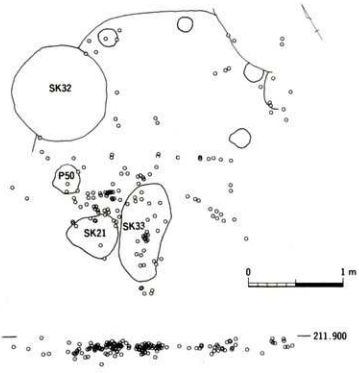
SB1（第5図）

畑地の中央を通る住宅への進入路の下から検出された。畑の耕作を受けた南側の2/3は撹乱により消失しており、範囲を確認することができなかった。残存部分の形状から見て隅丸方形になる可能性がある。柱穴は壁際に沿って巡り、やや小型で浅い。図示した以外にも、P25・50、SK15の2層もSB1の柱穴になる可能性があるが断定できない。炉は石組に使用されていたと思われる焼石を埋土中から動いた状態で検出したが、焼土は確認できなかった。覆土は、黒褐色の炭混じりのシルト質の土（1層）とややしまりの良い同じ黒褐色の土によっておおわれている。しかし撹乱が多く全面が一定でない。そのため、埋土中の出土遺物のなかには、後世の遺構であるSK21の埋土に含まれるものもあり（第6図）、原位置を保っているものは少ないと考えられる。



第5図　SB1実測図

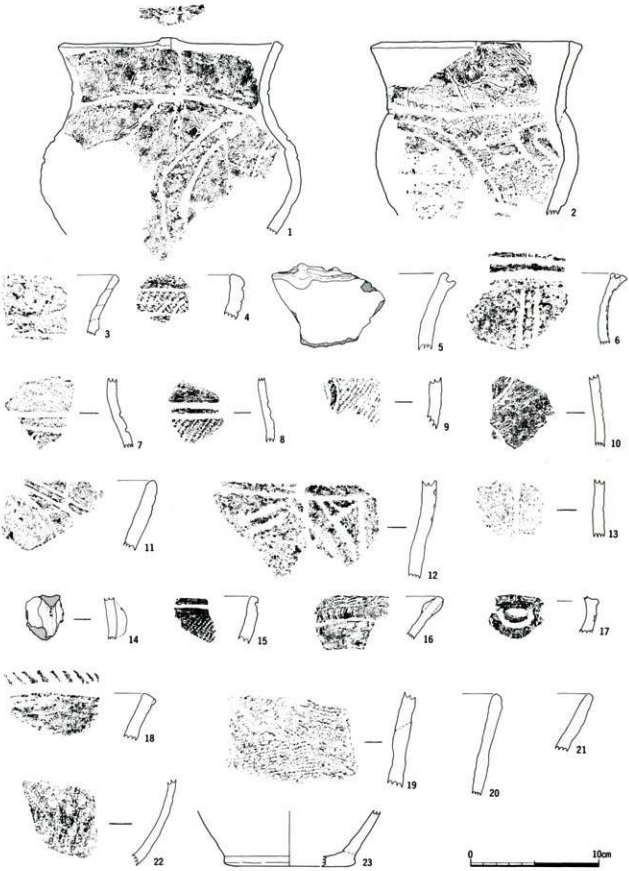
土器（第7図、第8図）　SB1からは、Ⅱ群の土器が主体的に出土している。1～3、5が1類に属する。1、2はa種である。1は面取りをした口唇部に円孔刺突を施した突起が見られる。頸部付近



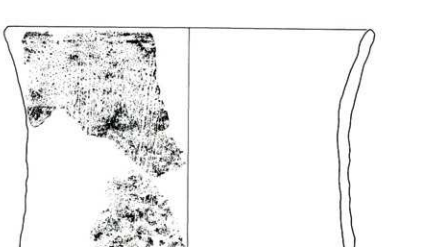
第6図　SB1周辺の遺物散布図

から垂れ下がるように施す縄文帯が特徴である。2は縄文施紋後沈線を施し、モチーフ内を磨り消す。5・6はc種である。5は口唇部に山形の小突起をもつ。6は縦位の沈線間に竹管による刺突を充塡する。黒色焼成で器壁が薄い。11・12は2類である。11は白い緻密な胎土が特徴で、内面が丁寧に磨かれている。2条沈線で直線的な紋様を描く。口唇部の突起には刻みが3ヶ所見られる。12は胴部と口縁部の紋様帯を区画するクランク状の沈線紋が特徴である。4類はb種の9・10・13がある。9は縄文を施した後、間隔の狭い2条沈線を引いている。丁寧な磨り消しは行われない。胎土が11と類似しており、同一時期の可能性がある。10は外面に削り調整が入る。縄文帯をもつが、粗雑な沈線が2類と類似する。14は7類とした。細長い断面をもつ隆帯上に串状の工具で刺突を施している。10類としては15・17がある。15は小型の鉢になると思われる。口縁上端に沈線を1条巡らせ、その下にLR縄文を施す。調整や胎土が11に類似しており、同時期のものと思われる。17は浅鉢であり、表面が剝落しているものの、丁寧な磨き調整が施される。屈曲部下にはU字状の沈線を施す。16も浅鉢である。内面に爪形紋を施した隆帯と貝殻による刺突紋をもち、外面には斜方向のナデ調整が見られる。他の遺物とは違い、中期前葉のものと思われる。その他は粗製深鉢である。無紋で外面を横方向に磨くもの（20・21）、オオバコ原体を用いるもの[1]（9）、縦位の条線を引くもの（24）がある。22に関しては、器形と器壁の薄さから1類となる可能性もある。後期初頭～前葉にかけての土器群と思われる。

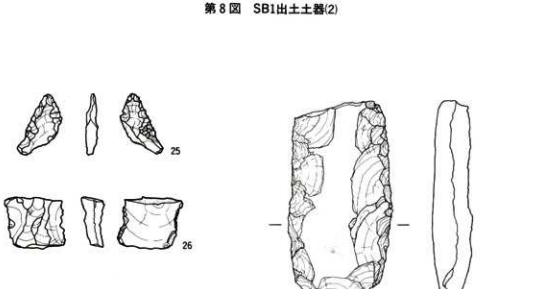
石器（第9図25～28）　SB1からは、石鏃1点、RF2点、UF4点、打製石斧2点、剝片45点が出土している。25は石鏃である。両面に1次剝離を残す。脚部の付け根がくびれる形状をもつ。26はRFである。素材時の自然面を残す。裏面の左右に微細な剝離痕が見られる。27はヘラ形石器である。両側縁を切断し、鋭利な上端部に微細な剝離痕をもつ。以上の3点はチャート製である。28は打製石斧である。自然面を残し、両側縁を成形する。刃部加工が見られ、砂岩製である。



第７図　SB1出土土器(1)



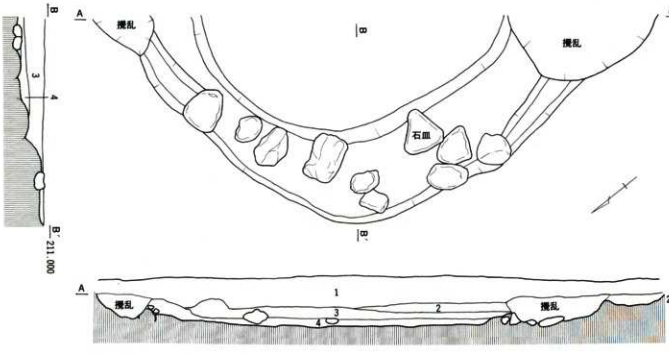
第8図　SB1出土土器(2)



第9図　SB1出土石器

SB2（第10図）

ほぼ全部が攪乱を受けた調査区南側の水田部から検出された。西側の2/5ほどが検出されたが、残りは調査区外に続いている。直径は検出部分で約3.3mである。炉は調査区外にあると見られる。柱穴も確認できなかったが、床面の存在と周溝、プランなどから住居跡と判断した。床面は黒褐色の粘質土が非常にしまりの良い状態で検出され、その厚さは5cmほどである。周溝は北と南の周囲を巡り、西

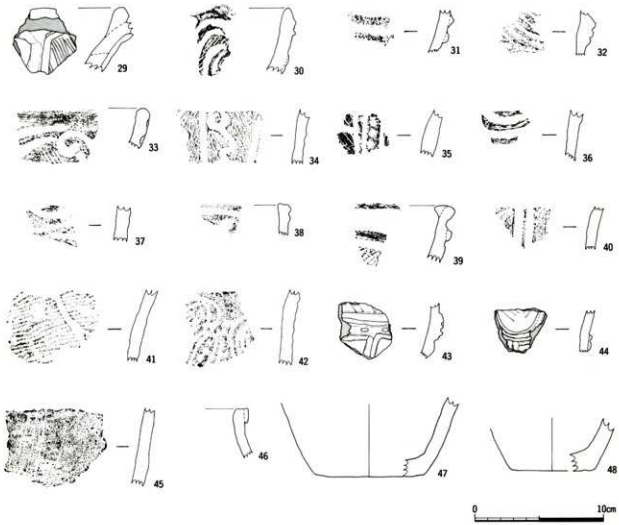


1　10YR⅔褐灰色シルト（耕作土）
2　1とほぼ同じ、レキ多　（　〃　）
3　10YR⅔黒褐色シルト（φ5㎜程度のレキ少量含む）
4　10YR⅔黒褐色シルト（非常にしまり良し、床面）

第10図　SB2実測図

側には存在しない。また掘り肩の周囲にはテラス状の部分が見られ、特に北側は床面土と同じ土を盛り上げて作られていた。またテラス上から石皿が据えられた状態で出土し、原位置を保っていた可能性がある。また図示した石は、テラス部（地山）から突き出ているため、本遺構が機能していた当時も存在していたかの可能性があるが、用途は不明である。ほぼ単層の黒褐色土で覆われており、黄褐色の地山を掘り込んでいる。

土器（第11図）　SB２からはⅠ群の土器が出土している。ほとんどが覆土からの出土しており、破片のみである。29～32、39は２類の土器である。29は口縁部から垂下する隆帯を下ろし、沈線を沿わせる。空間には撚条痕を配する。30は波状口縁になる。隆帯上に沈線を施す渦巻き紋をもつ。空間に撚条痕を施したのち、隆帯に沿う沈線を引く。31・32は胎土が類似している。39は口縁部を内側に肥厚し、断面三角形の口唇部をつくる。隆帯に沿う沈線が見られるのは他の土器と同様であるが、空間充填に無節Ｌの縄文を用いる。３類の土器は、33～38、40、41がある。33はやや内湾する口縁をもつ。沈線紋は渦巻きと弧状のモチーフをとる。空間には撚条痕を配する。34は33と似た胎土をもつ。撚条痕による地紋施紋の後、縦位に垂下する波状沈線を描く。35は縦位の沈線間に半截竹管による刺突列を配する。36・37は渦巻き状のになると思われる浅い沈線紋をもつ。41は地紋に縄文を用いる。42は２条沈線による縦長で斜めに流れる楕円区画をもち、空間に半截竹管の腹面を使った連続刺突を施す。この土器は金雲母・石英などの砂粒を多量に含み、異質な感じを受ける。43、44は胎土こそ他の土器と変わらないが細い粘土紐を施紋に用いる点や器壁が薄い点で異質である。45、46は粗製の深鉢である。45は縦位の撚条痕が見られる。46は折り返し口縁もつ。47・48は底部破片である。紋様、網代痕等はみられない。

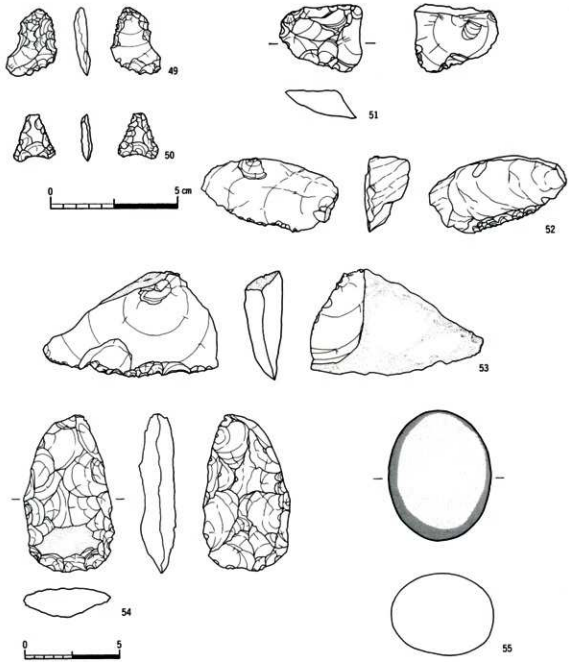


第11図　SB2出土土器

石器（第12･13図）　SB２は、覆土から石鏃２点、削器２点、掻器１点、UF４点、石核４点、打製石斧１点、石皿１点、磨石１点、剥片19点が出土している。49は石鏃である。背面からの衝撃で脚部が欠損している。脚部からくびれる形状をとる。チャート製である。50は先端が折損しているが、再加工がみられる。脚部の抉りは浅い。下呂石製である。51は流紋岩製のコアである。ポジティブ面を打点とし、片面のみで剥片剥離作業を行う。52はエンド・スクレイパーである。縦長の剥片を用いる。刃角が約80°であり、質の悪いチャートが用いられる。53はスクレイパーである。横長剥片を用いる。流紋岩製である。54は打製石斧である。やや小振りで刃部付近に自然面を残す。流紋岩製である。55は磨石である。長軸方向の両側縁に磨面をもつ。砂岩製である。56は石皿である。側縁を打ち欠いて平面形が三角形に近い形状になる。砂岩製である。

SB３（竪穴状遺構）（第17図）

竪穴状の掘り込みであり、覆土の状態から住居跡の可能性がある。しかし、炉･柱穴は確認できず、検出範囲が一部にとどまったため竪穴状遺構とした。４層から掘り込まれており、SB１より古い遺構と考えられる。遺物は細片のみであり、図示しなかった。

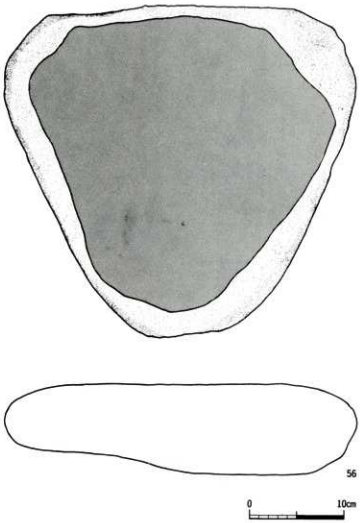


第12図　SB2出土石器

土坑・柱穴

SK26・28（図14図）

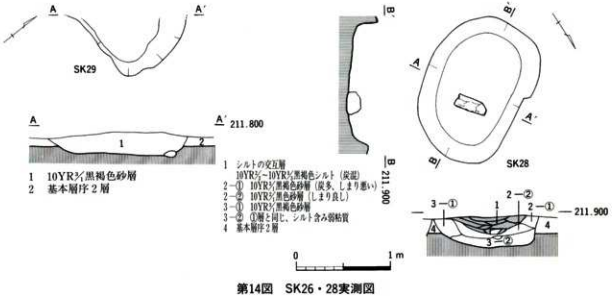
SB1周辺から検出され、ともに縄文土器・石器が出土している。SK26は楕円形のプランをもつと思われるが、西側半分が調査区外に続き、南側も攪乱によって上面が削平されていたため、全形は不明である。SK28は、長径1.48m、短径1.4mをはかる楕円形のプランをもつ。上面は炭混じりのシルト質の土、下層は大量の炭と黒褐色の土が堆積していた。底面にはかつて立石として用いられていたと思われる加工された石が寝かせた状態で置かれていたが、その性格は不明である。両土坑ともに2層か



第13図　SB2出土石皿

らの掘り込みであり、遺物から見てもSB1に近い年代の遺構と推定される。SK28についてはその不自然な堆積状況から人為的な埋没の可能性も考えられる。

土器（第15図）　SK26からは、II群の土器が出土している。57は2類に属する。口縁部から垂下する2条沈線内に縄文を充塡し、括れ部下の紋様帯に縄文を施紋後、横位方向の沈線を引く。この紋様帯のクランク状の分帯は、SB1の12と共通する。58は3本沈線によって引かれる紋様であり、後述する72のような土器の括れ部になると思われる。59も同一個体ではないが、同様紋様をもつ。60は粗製深鉢である。外面に横方向の磨き調整が見られる。SK28からもII群に属する土器が出土している。68・69・72はb種に属する。69は、3本沈線による横方向に流れる紋様をもつ。胎土は悪いが非常に薄手で、他の土器とは雰囲気を異にする。64は胎土が69に類似することから同一個体の可能性がある。68は69と同様に横流れの紋様をもつが、縄文をもつ点で異なる。72はやや厚手の土器で頸部に3条沈線をもつ。この沈線は途中で渦巻を巻いて途切れ、再び3本沈線が接続する構成になっている。また、頸部下から全面に縄文が施され、そこにSB1の1でみられた頸部から垂れ下がるモチーフの2条沈線紋が引かれている。67は72と胎土が酷似しており、同一個体と考えられる。70も72の胴部破片であろう。61～63は1類d種に属する。口縁部を肥厚し、沈線を施す。肥厚部は1本の粘土紐を用いている。66は、中心部に穿孔のある大突起をもつ浅鉢と考えられる。73・74は把手の破片であるが、どのような器形の土器に付いていたかは不明である。73は縦位の沈線と無節Rの縄文、74は沈線をもつ。71・75は縦位の条線を引く粗製深鉢である。非常に薄手のつくりであり、内外面とも丁寧なナデ調整が施される。75は口縁部にかけて大きく開く器形が特徴的である。

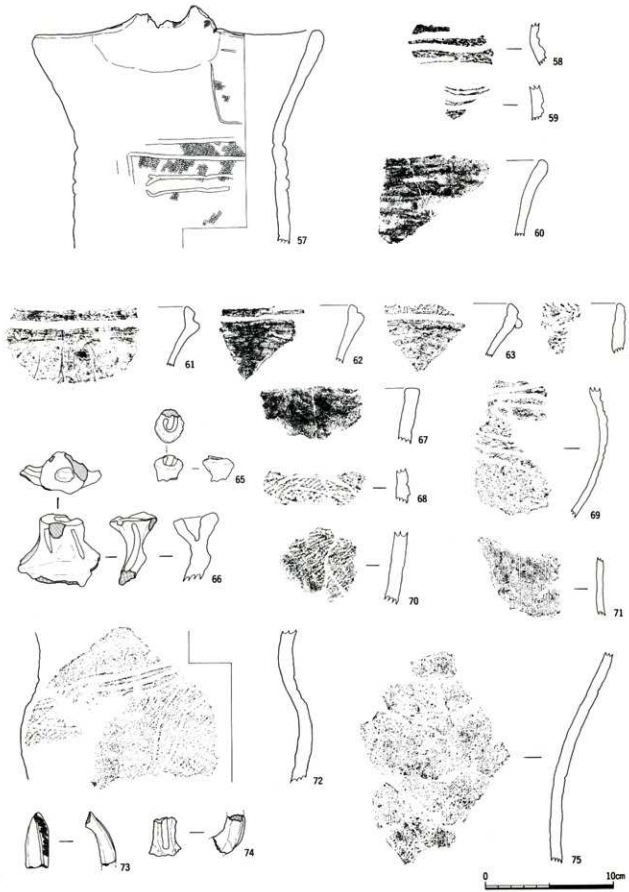


第14図　SK26・28実測図

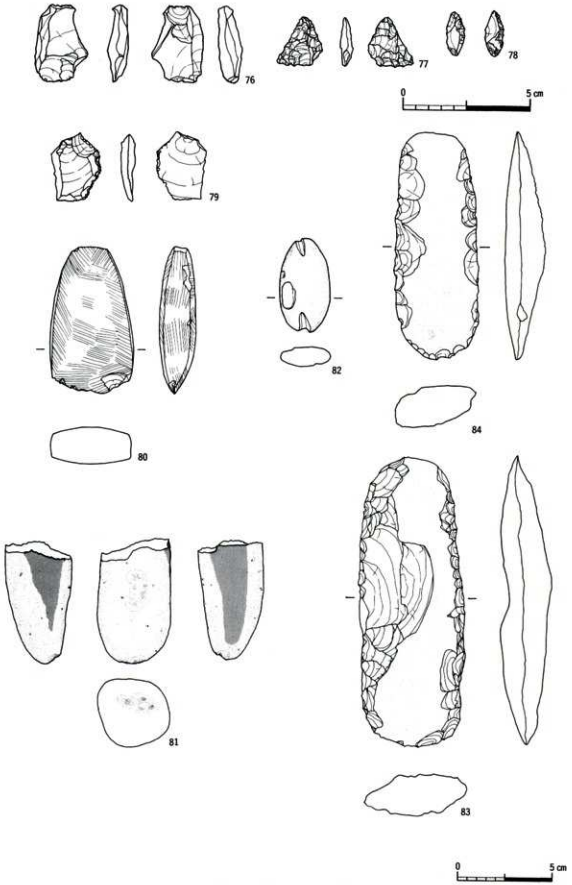
石器（第16図）　SK26からは石鏃1点、磨製石斧1点、SK28からは石鏃2点、石錐1点、RF1点、UF4点、石核1点、楔形石器1点、打製石斧3点、凹石1点、切れ目石錘1点、剥片14点が出土している。SK26出土の石器としては80の磨製石斧を図示した。定角式であり、表面に製作時のものと思われる削痕を残す。基部付近は縦方向、刃部付近は横方向、側縁は縦方向に削痕がみられる。片岩製である。その他はSK28からの出土である。76は楔形石器である。表裏に反対方向からの剥離がみられる。チャート製である。77は石鏃で基部が欠損し、ほぼ正三角形を呈する。チャート製である。78は細長い小剥片の側縁に加工が見られる。形態から石錐と分類したが、どのような用途で用いられたかは不明である。チャート製である。79はRFである。上端の摂理面に打点が見られる。右側縁に刃部加工がある。左側縁は摂理面である。チャート製である。81は敲石である。腹面と下端部にアバタ状の敲打痕がみられる。また両側縁に磨面があることから磨石としても機能していたと思われる。流紋岩製である。82は切れ目石錘である。表裏から斜方向に切れ目を入れる。砂岩製である。83、84は打製石斧である。左側縁側からの横剥ぎによる横長の剥片を用いる。打瘤のある左側縁を薄くするために入念な加工がみられる。刃部加工があり、自然面を残す。84も83とほぼ同様な製作技法が用いられるが、刃部加工がなされない。被熱している。83・84ともに砂岩製である。

その他の土坑・柱穴

SK8は規模的にはP6・P16とかわらないが、法量の1/3を占めるような石を入れていることとともに、その石の周辺から土器が出土している状況から土坑とした。SK15は不定形を呈し、東南側は調査区外へ続く。西端に柱穴状の埋土が見られ、位置的にもこの部分が、SB1にともなう柱穴の可能性がある。P6はⅡ層からの掘り込みである。柱を立てる際の掘り肩の埋土が観察され、柱部分の層が上面まであることから抜き取りが行われず埋没した可能性が高い。柱部分の太さは約35cm程である。P11は同じく掘り肩が見られるが、埋土の状況から柱を抜き取った後に埋没したものと思われる。柱穴部分は、約16cmである。このP11から、石皿が落ち込んだ状態で検出したが、出土状況から流れ込みの可能性が強いと思われる。いずれの遺構もSB1の周辺から出土しており、土器も砕片ながら同時期のものと考えられ、後期初頭～前葉の時期に属すると思われる。

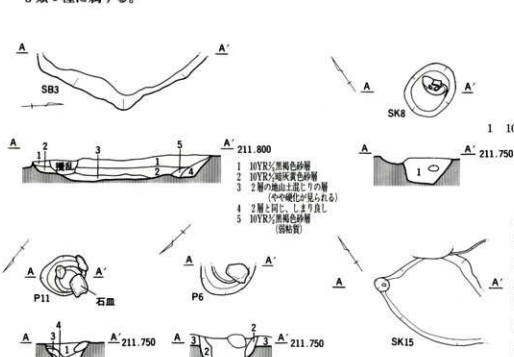


第15図　SK26・28出土土器（SK26：57～60、SK28：61～75）

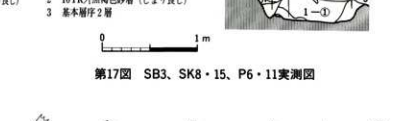


第16図　SB26・28出土石器

土器（第18図）　86・87はSK8出土である。86は大きく外反する胴部破片である。SK8の石の直上から出土した。無紋の粗製深鉢と思われる。87は沈線間に円形刺突を施すモチーフをもつ。88は拡張したT字型の口縁部に沈線による区画を施す。区画内には沈線紋、区画外には円形刺突が見られる。3類c種に属する。



第17図　SB3、SK8・15、P6・11実測図



第18図　縄文時代の柱穴・土坑出土遺物

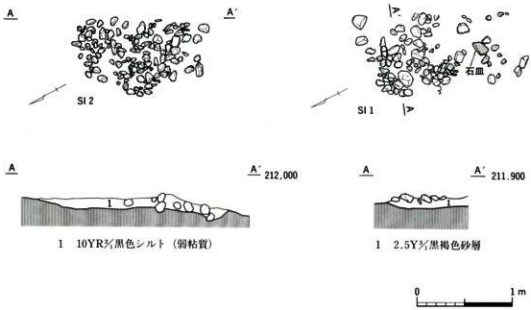
集石（第19図、遺物第20図）

今回の調査では、縄文時代に属する集石を2基検出している。

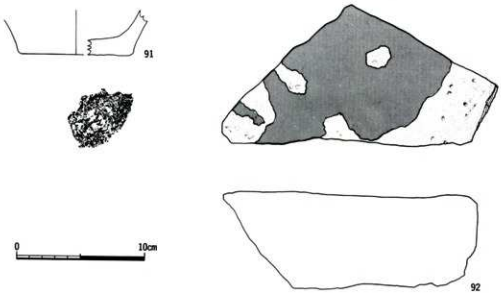
SI 1　縄文時代の遺構としては、調査区の最も北から検出された。径3cm～20cmの長楕円礫を約3m×2mの範囲に集めているが、東側は調査区外に続いている。石材に統一性は無く、河原石を用いているようである。中には被熱を受けて破砕したと思われる石皿も見られる。集石の下には約7cm程度の

掘り込みを確認したが、地山（4層）から埋土が盛り上げられており、上面に土が被せられていた可能性もある。Ⅲ層上面の遺構であることから、SB1よりも古い遺構であることが考えられるが、時期の特定できる遺物の出土はない。

SI2　SI1とは逆に、SB1より南から検出された。SI1と同じく調査区の東壁にかかっており、調査区外へ続いている。ほとんどの石が砂岩の長楕円礫であり、被熱を受けて赤変している。また西隅のチャートの扁平円礫は立てられた状態で出土している。Ⅲ層から約14cmほどの掘り込みが見られるが、ほぼ直上まで耕作による攪乱がおよんでいるため上面形態は不明である。時期の特定できる遺物の出土は無い。



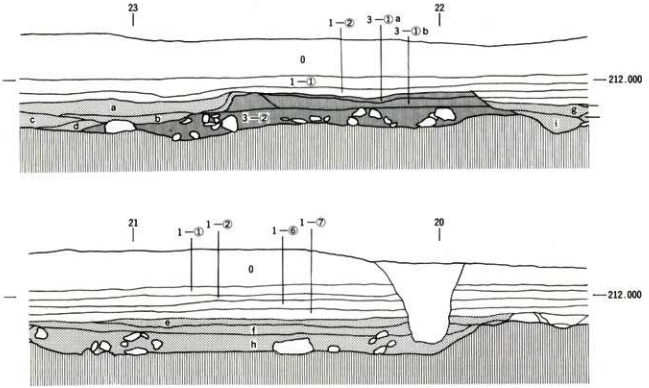
第19図　SI1・2実測図



第20図　SI1出土遺物

遺物集中地点（NR１、NR２）

調査区北側の旧水田の下から２本の自然流路と崩落堆積と思われる層を検出した。第Ⅲ章でも述べたように、崩落堆積層は後期前葉を主体とした遺物を大量に含んでいるため、この層の広がる範囲を遺物集中地点とする。この地点の南北から２本の自然流路が検出されている。第一に、この自然流路と遺物集中地点（以後集中地点と略す）との先後関係について考察する。北側の流路であるNR１は、層位的にみて完全に集中地点の層の上にのっており、明らかに集中地点埋没後の堆積と考えられる。NR１の底面の高さもほとんどNR２の南岸や集中地点の最下層と変わりなく、集中地点の層の堆積によって出来た流路と考えられる。一方南側の流路であるNR２は、一部堆積層が集中地点の層位を切っているものの、底面である地山が完全に下がっており、集中地点の層が堆積する以前から流路として存在していた可能性がある。ただし埋没年代は、集中地点からの土の流れ込みが見られることから、後の時代であると考えられる。集中地点埋没以上の観点から、最初にNR２が存在しており、次に集中地点の崩落堆積を引き起こした災害が起き、その後NR２、あるいは他の水源から集中地点の北側



NR1

a　10YR5/4褐灰色粘質土（しまり良し）
b　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土（下部粘子粗い）
c　10YR5/2灰黄褐色砂層（粘質、炭化物含む）
d　2.5Y5/4暗灰黄色砂層

NR2

e　10YR3/4暗褐色粘質土
f　10YR3/2黒褐色粘質土
g　10YR3/2黒褐色砂層（シルト含む）
h　10YR5/4褐灰色レキ砂層
i　10YR3/2黒褐色粘質土

第21図　遺物集中地点層位（数字の層位については第４図参照）

に水が流れ込んで NR 1 になったと思われる。その時の水流の勢いは、切り立った NR 1 の南岸に見て取れる。

次に自然流路の埋土（第21図）について考察する。NR 1 はほぼ同一色の黄褐色砂で埋没しているのが観察できる。これは NR 1 の浸食作用によって、上流から流されてきた地山砂と考えられる。この砂層は、上層から下層にかけて次第に粒子の大きい砂粒となることや、緩い流水による堆積層でみられるラミナが観察されないことから、下流において何らかの理由でせき止められた際の、沈澱堆積である可能性が高い。なお下層においてはラミナが観察されることから、NR 1 が安定した流れを保っていた時期もあったと考えられる。NR 2 の埋土は、人頭大の河原石を含む下層（h）と粘質土である上層（e・f）とに分かれる。遺物が多く含まれるのは集中地点のある北岸であり、層位から上記の2つの層を挟んで、2回の流れ込みがあったのを確認できる（g・i）。このことからからも NR 2 は、崩落による地形変化の後も存続していたことが確認される。

両河川は縄文時代後期前葉から上面に水田が作られるまで（12～13世紀）に埋没したと思われる。しかし、他の地区からも縄文時代後期から中世までの間の遺物が出土しておらず、この期間においては当地域での人の活動が行われていなかったと考えられる。そのため、流路埋没年代に関しては、時期を特定することはできない。

土器（第22～24図）　遺物集中地点からは多くの土器・石器が出土している。層位的には2層分けられるが、上層は上面からの耕作の影響で変化した下層の遷移層であり、遺物の分類基準とはならない。出土状況は、径50～80cmほどの石の下や間から出土する完全な二次堆積によるものであるが、時期的には後期前葉のものが大半を占め、まとまった資料といえる。なお、NR 1・NR 2 の遺物もその多くが集中地点からの流れ込みであると考えられるため、あわせて記述する。

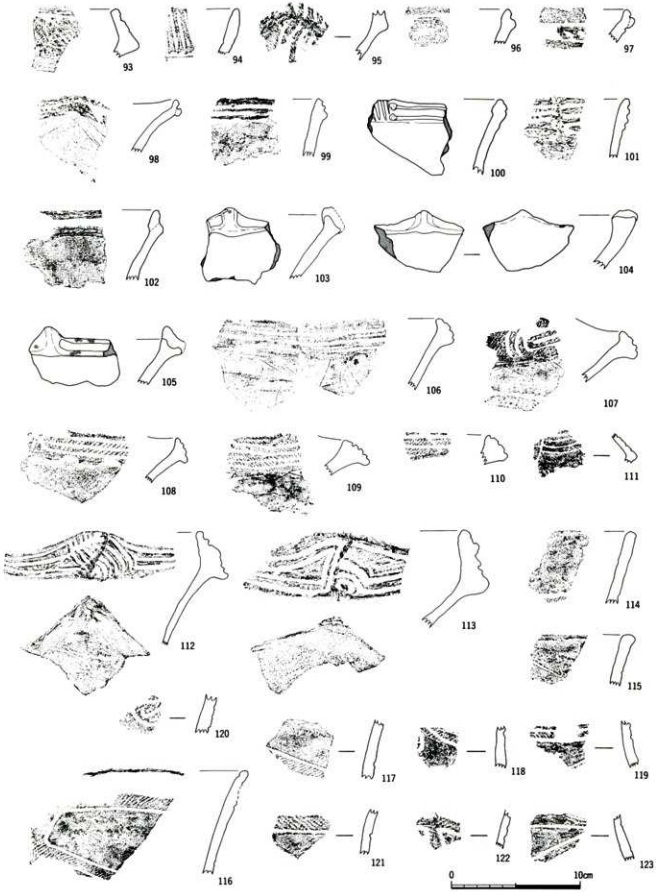
Ⅰ群

1類が1点のみ出土している。93は屈曲する口縁部をもつ浅鉢と思われる。口縁上端部の沈線下に鋸歯紋を施され、屈曲部には刻みが見られる。

Ⅱ群

1類　96～98はd種である。96は SK28のd種とほぼ同じ形態をもつ。97は口縁部拡張のために貼り付けた隆帯上に刻みを施す。98は緩い波状口縁をもつ小型の土器である。大きく外反する口縁部や縄文を施した拡張部からd種の中でも新相と考えられる。

3類　集中地点の中で最も主体となる土器群である。94・95はa種である。94は幅広な肥厚部に縦位の集合沈線を施す。95は口縁が屈曲する部分の破片であり、その上下に集合沈線を施す。下部には縄文もみられる。112・113はb種である。沈線が集中する波頂部下の屈曲部が、角張って突き出ている。これに3条の沈線が接続する。内外面が丁寧に磨かれており、胎土も緻密で器壁も薄く、他の土器とは一線を画す。113も112と同様な口縁部形態をもつが、沈線が太く雑であり、モチーフが省略されている。99～101はc種である。99は口縁部は直線的に開くやや小型の土器である。肥厚部に2条の沈線が施される。100は口縁の拡張部分の境が明瞭でない。また拡張部内面に粘土紐の貼り付けがみられる。拡張部に2条沈線が施紋され、口縁部が突起となる部分で円孔刺突と縦位の集合沈線を引いて紋様を区切る。101は肥厚部に縄文を施した後、3条の沈線を描く。また、雑ではあるが竹管による刺突も見



第22図　遺物集中地点出土土器(1)

られる。内外面には横方向の丁寧なナデで調整されている。106～110はｄ種である。106はやや丸みを帯びた拡張部に３条の細い沈線を巡らす。外面は横ナデによって調整され、胎土も緻密である。107は強い波状になる口縁部破片である。Ｔ字型の拡張部に縄文を施した後、沈線による長方形区画文・弧状文を施す。器壁が薄く丁寧なつくりである。108も同様な形状と紋様をもつ土器であるが、長方形区画の内部が磨消縄文になっている。また、拡張部の幅がやや狭い。109は逆Ｌ字型の拡張部全体に縄文を施した後に、４条の沈線を施す。他の同類の土器とは違い、内湾した口縁をもつ。110は108と同じ紋様構成をもち、器壁が厚く胎土が粗い。111は「く」の字型に内屈する口縁が特徴的であり、集合沈線によって弧状のモチーフを描く。103～105はｅ類に属する。山形の突起をもつ。形態的にはｄ類に類似するが、胎土が粗く調整が粗雑である。104は別の器形である可能性があるが、胎土・施紋に共通点が見られることからここに分類した。なお、102も同様に沈線を用いないが、口縁部を屈曲させる手法はｃ類の100にちかく、胎土も類似している。

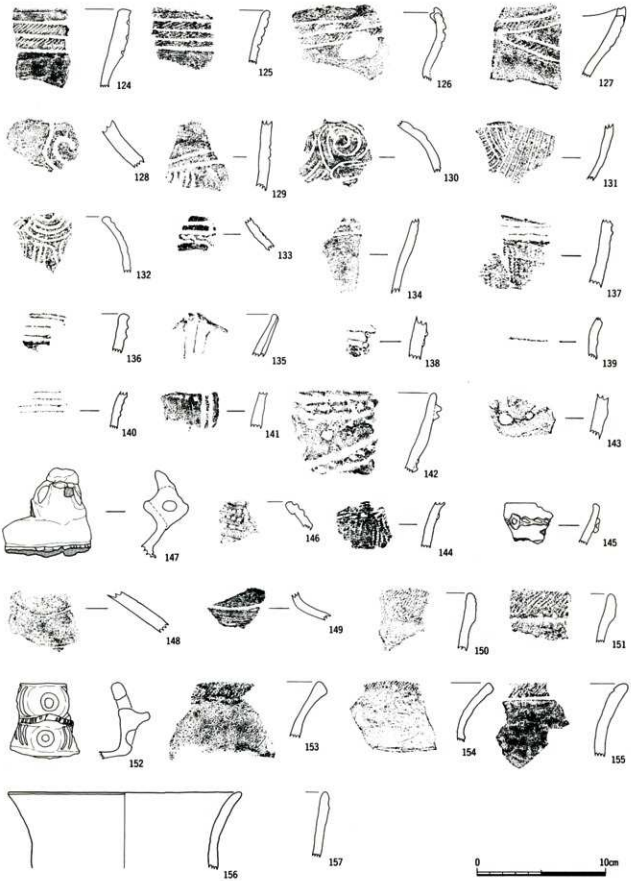
４類　114・116・117・119・121・122はａ種である。114は口縁部から縄文帯までに広い空間が存在する。116は、直線的な縄文帯を連結させる紋様をもつ。刺落した口縁上端部には有刺隆帯が付されていたと思われる。117は116の同一個体である。121も116に類似する紋様をもつ。122は「×」字型に交わる縄文帯が特徴である。118・122・120はｂ種とした。120は３類の胴部破片である可能性があるが断定できない。

５類　115・116がこの群に属す。115はやや外傾する口縁部破片である。沈線による直線的な紋様が描かれる。

６類　124・125はａ種である。124は肥厚した口縁に３条の沈線による磨消縄文帯を描く。内外面ともに丁寧なナデ調整が施され、口唇部が面取りされる。125は４条の沈線で描かれるが、胎土が粗く表面が荒れている。126・127・185はｂ種である。126は内湾する口縁をもち、３条の沈線による磨消縄文を施す。口唇部の突起には内面方向からの円孔刺突がみられ、面取りが行われている。127は波状口縁である。波頂部付近には沈線の痕跡がみられるとともに、口唇部は面取りが行われる。185も同様な形態をもつ土器である。口縁部は緩い波状になると思われる。

７類　128～134・198・200が属する。128は太く深い沈線で渦巻き状の沈線紋を描き、器壁が厚く、胎土も粗い。129は、多重となる半円形のモチーフの一部が見られる。130は沈線が密に施され、渦状となる沈線紋をもつ。器壁は薄い。131は130と胎土が酷似するが、集合沈線によってより密な紋様を描く。132は口縁部破片で、多重半円紋を口縁部下に施す。空間には端を閉じた２条沈線を充填する。133は前述の閉じた沈線を横位に施し、空間に連続刺突を加える。134はこの沈線が互い違いに施され、その沈線は細く浅い。下部は丁寧に磨かれている。

８類　８類はｂ種を除いて、器壁が薄く胎土の粗い土器が多い。ａ種には136～141が属す。135は波状口縁となる破片である。波頂部から垂下する微隆線を中心として、３本が施される。136～138は同一個体と思われる。136は口縁部破片であり、口縁端と合わせて３本の微隆線が横位に施される。137は、136とほぼ同じ部位と考えられ、下部には縄文が施される。137もほぼ同一部位と思われるが、微隆線をつなぐように縦位に貼り付けられた粘土紐上に竹管による刺突が施される。139・140は横位、141は縦位の微隆線をもつ。ｂ種には142・143がある。142は口縁部上端下に太い隆帯をめぐらせ刺突する。143にも太い隆帯が見られるが、刺突ではなく指頭圧痕が施される。ｃ種には144・145・181が属する。



第23図　遺物集中地点出土土器(2)

144は有刻隆帯下に縄文をもつ。145と181は形態的に類似するが、195にみられる「8」字状貼り付け文が145では円形紋になっている。181の隆帯下には磨消縄文が描かれると思われる。

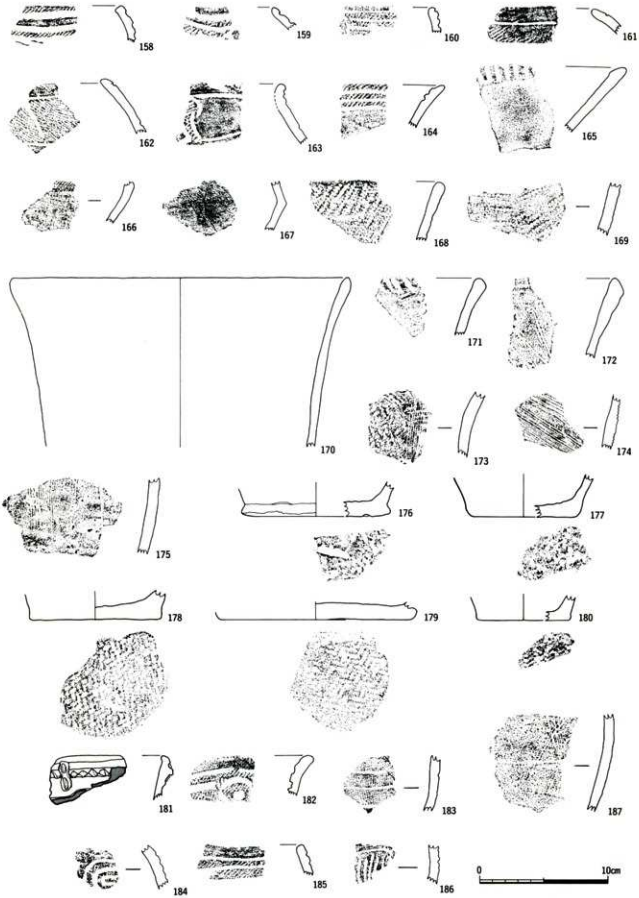
9類　146・147がこれに属する。146は口縁部破片であり、3条の押し引き沈線を横位に巡らす。口唇部が内側に折り返される。147は頸部に1条の押し引き沈線が見られる。頂部に貼り付けをもち大型の把手が特徴的であるが、それほど法量は大きくない。この2点は胎土・調整がよく似ており、同時期のものである可能性が高い。

10類　153～155はa種である。153・154は外反する口縁部形態によって外側を向いた口唇部を面取した後、縄文を施す。154には頸部の沈線も見られる。155は内面施紋であり、口縁上端に磨消縄文を施す。156はb種で、無紋で端部調整は見られない。やや小型の土器である。

11類　深鉢以外と思われる器種を一括する。148・149は条痕を曲走させ、それに沿って沈線を施す。外面は丁寧に磨かれている。148はやや器壁が厚く、壺形の形態をとる可能性がある。これにちかい類例は郡上郡八幡町勝更白山神社周辺遺跡にみられる。149は同様の形態か、もしくは注口土器になると思われるが断定は出来ない。150・151は口縁部を肥厚しそこに縄文を施紋する。器高の低い鉢形の土器になると思われる。152は「8」字状に貼り付けた隆帯を中心に紋様が展開する土器である。隆帯に沿って連続した弧状沈線が描かれる。また、「8」字モチーフを上下に分けるように横位に刻み隆帯が付される。「8」字の上の円の中心は穿孔されている。器形は、鉢もしくは浅鉢になると思われる。158～163は磨消縄文を施す口縁部破片である。この中には細片のため、器形を特定することが出来ずに10類に分類したものも含む。158は内湾する口縁部と太い沈線による磨消縄文をもつ。口唇部には面取りが見られ、補修孔が穿たれる。159は口縁部が短く内折する浅鉢と思われる。磨消縄文の他、円形のモチーフをもつ。160は砂粒が多い胎土の粗い土器である。縄文施紋後に、短い間隔で横位沈線が引かれる。161はやや幅広の磨消縄文帯がみられる。162も同様の形態をもつが、無節Rの縄文を用いており、縄文帯は倍の幅をもつ。163は内折した口縁部に磨消による広い無紋部をもつ。器形は鉢になると思われる。165・169は口縁が開くタイプの浅鉢である。165は口縁内面の上端を刻む。胎土も密であり、非常に丁寧な調整が施される。169は内面端部が受け口状の段になる。166・198は内面施紋の浅鉢である。166は内面に3本沈線による磨消縄文が施される。198はやや太い沈線で描かれ、円形のモチーフがみられる。砂粒が多く、胎土が粗い。166・167は「く」字状に屈折する胴部をもつ土器である。外面が丁寧に磨かれており、黒色焼成している。166・167は屈折部の上の部分に縄文が施される。167の内面にはコゲが付着している。

12類　170・171・176はa種である。170は削り・ナデ等の器面調整を比較的丁寧に行っている。171には口縁部外面の上端に刻みが見られる。168・169はb種である。172～175はc種である。条痕によって3種類に分けられる。172は間隔の広い条痕原体を用いる土器である。3本の条痕が1単位となっている。173～175は櫛条痕をもつ土器である。173は縦位の櫛条痕の他、違う種類の条痕・RL縄文を同一器面内にもつ。174は条痕が斜位に施されるのが特徴的である。その他の粗製土器としては187がある。格子状の平行沈線を器面に施す。原体は半裁竹管であると思われる。

13類　176～180は底部破片である。器形的には胴部が外に向かって開くタイプのものが多い。底面に網代痕がみられるものを図示した。177は2本越え・2本潜り・2本送り、この内178は2本越え・2本潜り・1本送り、179は2本越え・1本潜り・1本送り、180は1本越え・1本潜り・1本送りである。



第24図　遺物集中地点出土土器(3)

石器（第26図～第28図）　石器の出土状況は土器と同様であり、時期的にもほぼ後期前葉に限定されると思われる。出土した石器は石鏃２点、楔形石器４点、削器７点、RF５点、UF13点、横刃型石器１点、打製石斧37点、切れ目石錘１点、打ち欠き石錘１点、凹石１点、叩き石１点、剥片202点が出土(NR１・２出土のものもふくむ）している。

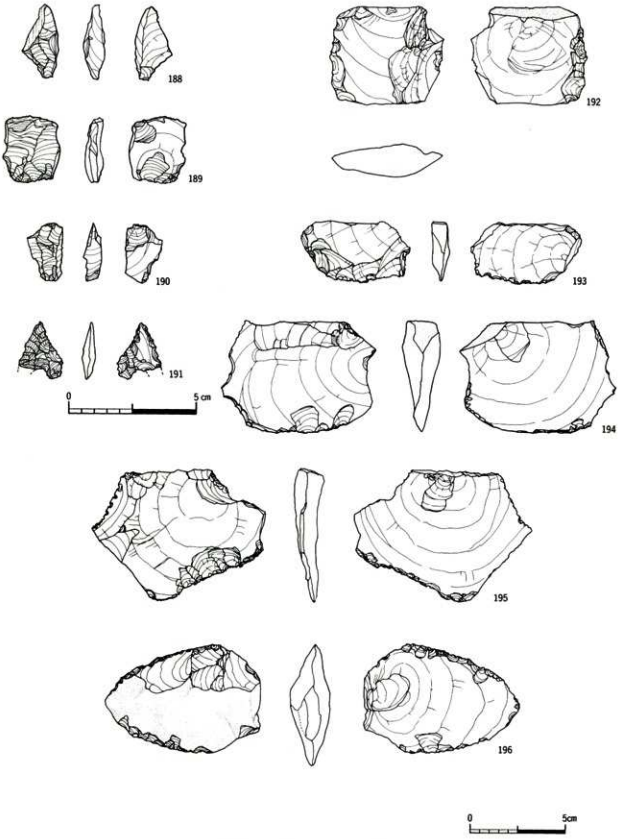
石鏃　１点図示した。191は肩の張る形態を有する。左脚部には折損が見られる。素材面を片面に残しており、打点は左側縁の方向にある。チャート製である。

楔形石器　３点図示した。188はつぶれ状の剥離痕と対照的な位置からの加撃による截断面が見られる。左側縁は摂理面になっている。下呂石製である。189は下端の両面に大きな剥離痕が見られる。左側縁の上部と右側縁は截断面になっている。上端と下端にツブレ状の微細な剥離が見られる。チャート製である。190は上端と下端に微細な剥離痕が認められ、右側縁が截断面になっている。下端の折れ面はツブレ状の剥離や截断面によって切られていることから、素材段階のものと思われる。チャート製である。

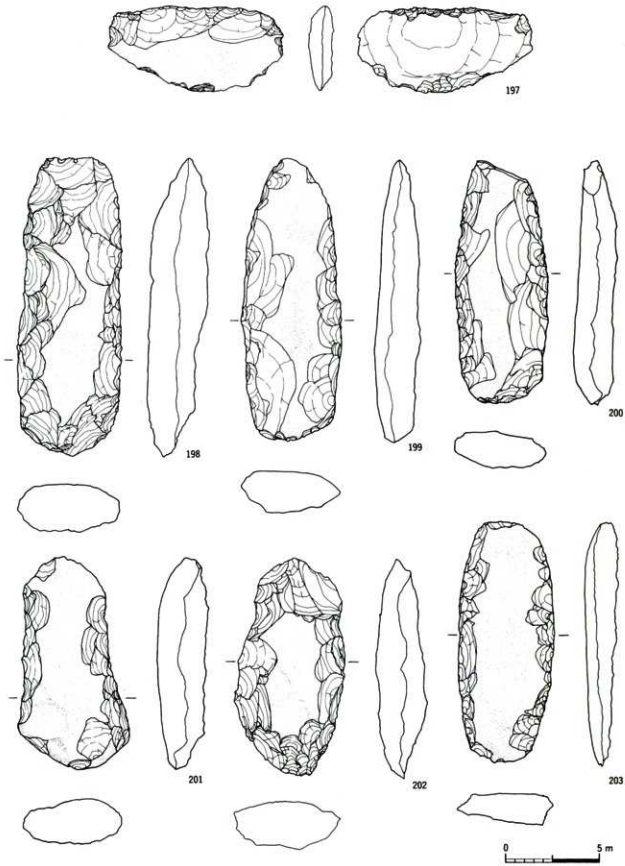
削器　６点図示した。192・193・196は縦長剥片を素材としている。192は両側縁を加工し、下端には裏面からの折れが見られる。流紋岩製。193は刃部の反対側には折れが見られる。石材はサヌカイトか？。196は両側縁に刃部加工を丁寧に施す。自然面の残る表側を加工し、これにより両側縁の刃部が、ほぼおなじ角度となる。流紋岩製である。194・195は横長剥片を利用している。194は下端部と左側縁に刃部をもつ。上端には自然面を残す。195は折れ部以外のすべての側縁に刃部加工がみられる。ともに流紋岩製である。

横刃型石器　197は横長剥片を表側は上端、裏側は上端と下端を中心に加工している。刃部と見られるのは下端であるが、刃に鋭さはなく削器としての機能を有していたかどうかは疑問である。そのため、横刃型石器として別に分類した。打製石斧製作時の剥片の利用が考えられる。凝灰岩製である。

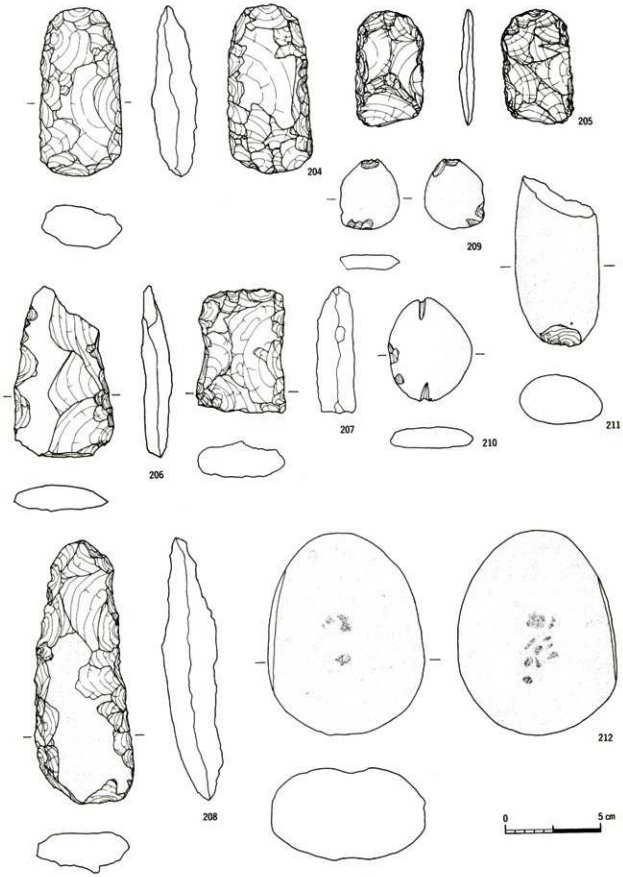
打製石斧　打製石斧は集中地点において最も多く検出した石器である。素材の自然面を残すものが多く、円礫の平坦面から得られた横長剥片が用いられている。平面形は両側縁が平行な短冊形(198･200)が最も多い。しかし中には201や206のようなバチ型に近い形態をとるものや、199や208のようにどちらとも言い難いものもあり、意図的に形状を整えたのでなく、素材剥片剥離時の形状に起因することが大きいように思われる。縄文時代中期から晩期まで、形状の変化はあっても基部の太さの変化は少ないことが言及されているが[4]、形態より基部の幅を基準とした側縁加工が重視されてたのであろう。198や206のように基部に集中的な加工のあるものは、素材となる剥片の基部付近の厚さも関係していると考えられる。そのことは、剥離作業段階ですでに薄い素材は基部に自然面を残し、裏面のみの加工となることからも分かる。特殊な形態としては、202や207のように基部に抉りが入るものがある。いずれも表裏からの基部側縁の加工が顕著である。大きさはほぼ11cm～12cmのものが多く、最も大きいもので198の15.7cmである。最も小さいものは204の7.5cmである。なお204は数少ない自然面の残らない個体である。重量は、長さほど一定しておらず、重いもので345.2ｇ、軽いもので100.5ｇである。石材は流紋岩製のものが最も多く、凝灰岩･砂岩製のものは少量であった。特殊なところでは、202の泥岩、205の結晶片岩がある。刃部は加工するものがほとんどであり、磨耗痕などの使用による痕跡は認められない。また、少量ではあるものの流紋岩や砂岩の剥片が出土しており、当地域で打製石斧が製作されていた可能性がある。



第25図　遺物集中地点出土石器(1)



第26図　遺物集中地点出土石器(2)



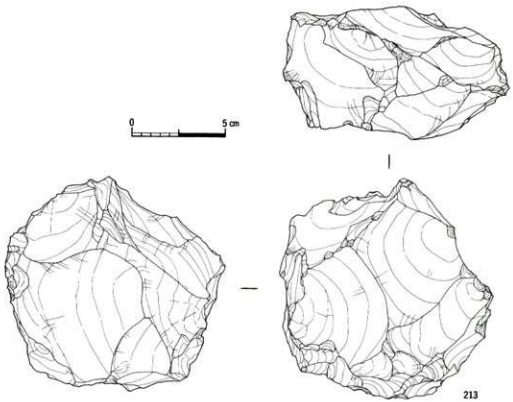
第27図　遺物集中地点出土石器(3)

石錘　209は打ち欠き石錘である。下端には3ヶ所の剥離がみられる。また、裏側にも表側に対応するように剥離がみられるが、下端で対応する剥離があるのは3ヶ所の内、左側の剥離のみである。210は切れ目石錘である。切れ目は両面に見られ、抉頂部が平坦になる。209・210ともに扁平な砂岩の小礫を素材とする。

叩き石　211は長楕円礫を素材とする。剥離痕は1ケ所のみに見られ、打点部分にはアバタ状の敲打痕が見られる。持ち手側が折損している。流紋岩製である。

凹石　平坦面の両側に敲打にとると思われる3ヶ所づつの凹みがみられる。凹みの底面にはアバタ状の敲打痕が観察される。側縁が加工されて平坦になっている。凝灰岩製である。

石核　分割礫を素材とし、薄片剥離作業によって生じた稜部をさらに打点として、全面を作業面としている。分類では4類に相当する。剥離面から推察すると、それぞれの剥片はかなり大きかったと考えられ、194や195などのスクレイパーに用いられるものに匹敵する。このことからこうした剥片を作出するための石核であったと思われる。このことは流紋岩製の石器に定型的な剥片石器が少ないことからも推察される。



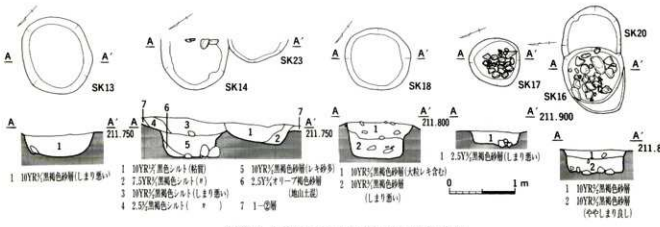
第28図　遺物集中地点出土石器(4)

第２節　中世の遺構と遺物

柱穴・土坑（第29図）

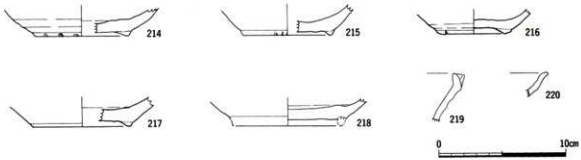
中世の遺構としては、柱穴31基・土坑15基を検出している。柱穴に関しては、１部の遺構から山茶碗が出土していることから、同様の形状をもつものを中世の遺構と判断した。円形で径の小さいものが多いが、当時表土があった位置からの掘り込みであることを考慮すると、かなり深く掘り込まれていたのが予想される。なお、堀立柱建物は確認することができなかった。土坑は、（１）円形で径が大きく、やや浅いもの、（２）円形で非常に深く掘り込まれており、埋土に大量の河原石を含むもの、（３）（２）と同様の形状で底に河原石を敷き詰めるもの、（４）他と比べ径が小型で浅く、底に河原石を敷き詰めるものの４タイプに分けられる。第29図のSK13･23は（１）、SK14･18は（２）、SK16は（３）、SK17は（４）である。用途については、SK18から骨片が出土していることから土坑墓と推察される。いずれの土坑も、埋土や円形の形状に共通点がみられ、同様の用途で用いられていたと思われる。また検出地区が、A16～18グリッド付近に集中していることから、集団埋葬を行った墓域であった可能性もある。時期的には、SK13から出土した荒肌手山茶碗から、12～13世紀頃の遺構と考えられる。

遺物（第30図）　214～218は荒肌手山茶碗である。217・218は底部内面と体部内面の境がわずかに凹み、他はなだらかであることから、時期的にはいずれも藤澤編年５～６型式の範疇に含まれると考え



第29図　SK13・14・17・18・20・23実測図

られる。また、いずれも胎土中に長石の吹き出しがみられないことから瀬戸産であるある可能性は低い。210は古瀬戸の擂鉢であり、口縁部に指による片口が施されている。220は大窯の端反皿であり、体部外面下方には回転ヘラ削り調整がなされている。なお、時期的には219が古瀬戸後Ⅳ期(新)、220が大窯第１段階に比定される。



第30図　中世遺構出土遺物（SK13：214、SK29：215・219、SK21：216、P36：217・218、SK30：220）

第1表　中世遺構一覧表

遺構名	位置	長径×短径（cm）	底面レベル（m）	形態	土色
P2	A18	23×18	211.53	楕円形	黒褐色土
P3	A18	26×23	211.56	円形	①黒褐色土②暗オリーブ褐色砂
P5	A18	30×21	211.5	楕円形	暗オリーブ褐色土
P8	A18	25×20	211.57	楕円形	黒褐色土
P9	A18	53×40	211.45	不整楕円形	黒色土
P10	A18	27×25	211.49	円形	黒褐色土
P15	A18	26×25	211.52	円形	①黒褐色土②暗オリーブ褐色
P16	A18	35×24	211.47	楕円形	黒褐色土
P19	A18	28×25	211.463	円形	黒褐色土
P20	A18	28×28	211.47	円形	黒褐色土
P21	A18	36×28	211.51	楕円形	オリーブ褐色土
P22	A18	?	211.53	?	黒褐色土
P23	A16	26×24	211.45	円形	黒褐色土（地山砂混）
P24	A16	24×23	211.6	円形	黒褐色土
P25	A16	44×27	211.57	楕円形	黒褐色土
P32	A13	32×32	211.046	円形	①暗褐色土（地山砂混）②黒褐色土（地山砂混）
P33	A12	?	211.24	?	黒褐色土（炭混）
P34	A12	28×24	211.06	円形	黒褐色土（炭混）
P35	A12	32×29	211.04	円形	黒褐色土（炭混）
P36	A12	42×37	211.13	楕円形	黒褐色土（炭混）
P38	A12	24×21	211.24	円形	黒褐色土（炭混）
P41	A17	20×19	211.79	円形	黒褐色土
P42	A17	39×37	211.52	不整円形	黒褐色土（地山砂混）
P43	A17	30×21	211.62	不整円形	黒褐色土
P44	A17	25×23	211.65	円形	黒褐色土
P45	A17	?	211.55	?	黒褐色土
P46	A17	?	211.57	円形？	黒褐色土
P47	A17	28×28	211.58	円形	黒褐色土
P48	A19	32×28	211.37	円形	黒色土
P49	A19	47×44	211.38	円形	①黒褐色土②黒色土③黒褐色粘質土
P52	A19	44×32	211.6	楕円形	黒色土

遺構名	位置	長径×短径（cm）	底面レベル（m）	形態	土色
SK2	A16	85×80	211.43	円形	①黒褐色シルト②黒褐色シルト（しまり良し）
SK3	A18	51×42	211.573	楕円形	黒褐色砂
SK4	A18	85×50	211.493	不整楕円形	①灰オリーブ褐色シルト②黒褐色砂
SK6	A19	66×35	211.49	長楕円形	暗褐色砂
SK19	A16	51×35	211.55	楕円形	①黒褐色砂②暗褐色砂
SK23	A16	?	211.495	?	①黒褐色シルト②黒褐色シルト（粘質）
SK25	A15	82×57	211.45	長楕円形	①黒褐色砂②暗褐色砂（地山砂混）
SK27	A16	90×90	211.75	円形	黒褐色砂

第VI章　ま　と　め

第1節　高見遺跡出土の縄文土器

第IV章において土器の各属性に着目した分類を行ったが、これらの属性が既成の編年観においてどの段階に位置付けられるかを検証する。Ⅰ群とした中期の土器は1類が前葉、2～5類が末葉にあたり、中葉・後葉の遺物は全く出土していない。1類については出土数が少なく包含層・遺構に伴うものが無いため図示はしていないが、中国地方の船元Ⅰ式や北陸の新崎式、東海の北裏C式に比定される細片が出土している。2～4類については、加曽利E3～4式併行期の遺物と考えられ、県下では比較的類例の多い土器である。4類とした42については、特徴的な胎土や紋様から他地域からの土器の搬入が考えられる。類例としては、岐阜県藤橋村戸入村平遺跡の報告書の中でC11群D類と分類された土器群がある。

本遺跡で主体となるⅡ群の土器については、遺構出土土器と集中地点出土の土器に大きく分けられる。SB1の1・2のように、外反する口縁部が無文帯となり胴部に沈線文と縄文による紋様が描かれる土器は、関東地方の堀之内Ⅰ式期の鉢型器形の土器にみられる特徴である。また、福井県右近次郎遺跡出土の堀之内Ⅰ式併行期とされる土器の中に、頸部区画線や胴部紋様が1のモチーフと類似するものがあり、時期的な同時性が考えられる。b種としたSK28の69にも同様な胴部紋様が存在するが、磨消縄文では無くなっている点、3条の沈線による渦巻状文などに異なる要素を備えており、時期的に下る可能性がある。おそらくは堀之内Ⅰ式段階での変化と思われる。1類c種とd種についてはSB1出土のものがc種、SK28出土のものがd種となり、時期的変遷が想定可能なことも興味深い。SK26の57は器形的・紋様的にやや古相と思われるが、58・59等69と同様な紋様をもつと思われる土器が伴出していることから堀之内Ⅰ式併行期としたい。3類は集中地点において最も特徴的な土器群である。3類のa種は幅広の肥厚をもつ一群であり、関西の縁帯文系土器群の中でも古い段階のものと思われる。b種も口縁部の沈線文様帯が非常に幅広で密な紋様が描かれることから、ほぼ同時期と思われる。d種はおもに福井県方面に類例がみられ[5]、堀之内Ⅱ式併行期でも比較的古相のものとされる。しかし、100のような肥厚・拡張が弱まるものや、101のような口縁部の外傾が弱まり縄文帯が多段化するもの、106のように縄文が省略され拡張部が丸みをもつもの等に新しい要素が見られ、時期差を内包していると思われる。4類は116など典型的な堀之内Ⅱ式の深鉢であり、胎土も精良で丁寧に作られている。6類に関してはa種が101との共通点からやや古相と判断されるが、b種になると加曽利B1式段階まで下るものと考えられる。7類は堀之内Ⅰ～Ⅱ式併行期の範疇で捉えられるが、132に見られる端部が閉じた集合沈線が133・134では横位方向に描かれ、やや後出的な様相を見せる。8類に分類した土器群は、飛騨地方において後期前葉にみられる、いわゆる宮田式土器と堀之内式土器の要素を含んでおり、本来分離されるべきものである。しかし、138のように堀之内式土器に特徴的な「8」字状貼付を意識したような紋様等、両者の繋がりが見られる資料が存在し、両者の関係が示唆される。9類は2点のみの出土であったが特徴的であるため、あえて分類した。他遺跡に類例がないため、今回は時期的な位置付けは避けるが当地域の後期前葉の土器として今後注目していく必要があると思われ

る。11類に関しては150・156が縄手遺跡などで類例のみられる北白川上層Ⅰ～Ⅱ式の土器[6]、66が堀之内Ⅰ式段階の浅鉢、165などの堀之内Ⅱ式的な土器、148・147の黒色焼成の土器や164・182の内面施文の浅鉢等、加曽利Ｂ１式的など土器等が見られる。12類の粗製深鉢に関しては、図示している点数は少ないものの、170のような無文で丁寧な調整が施されたものが圧倒的に多く、楕条痕や縄文を施文するものはむしろ少数である。なお、187は加曽利Ｂ式段階でよく見られる粗製土器であると思われる。

以上のように時期的な概観を述べたが、SB２は中期末葉、SB１を始めとする中央の遺構群が後期前葉の古相、遺物集中地点が後期前葉後半の遺物が中心になり、出土場所によって時期による変遷が見られる。このことは居住域が時期ごとに場所を移動しながら存続していたことを意味している。また土器の様相も時期的に極めて短期間である上に多様な地域性が見られ、当遺跡の所在する奥美濃地方と福井や美濃・飛騨といった地域との交流を考える意味でも重要な資料であると思われる。

第２節　高見遺跡の様相

今回、国道に沿った細長い調査区の制約上広範囲な検出が行うことが出来ず、集落の全容を明らかにしたとは言い難い。しかし、南北に長い範囲を調査することで、当時の人々の生活領域の変遷を明らかにしたことが成果として上げられる。一つは縄文時代の河川と集落地の位置関係である。縄文時代人にとって水源の確保は必要不可欠な問題であり、比高差のない小川であったNR２は、理想的な水場だったと思われる。また、石器の石材となる河原石の採集や漁労などで、本流である板取川も利用していたであろう。２つ目は居住域の移動である。今回の発掘で検出された住居跡は中期末と後期前葉の２軒であるが、後期前葉の遺構が検出された地点の表土・包含層に中期末の遺物が混じらない点から、少なくとも中期と後期では集落領域が移動していたことは間違いないと思われる。また崩落堆積がみられる集中地点の存在からNR２の上流方向にさらに集落が移動したことが予想される。

土坑・柱穴が検出された中世についても生活領域について考えることが出来る。先述したように掘立柱建物は検出されなかったものの、柱穴群が集中するA11～13、A17～19に集落域が想定され、それを挟んで土坑墓群が存在する。この地点は、A１～９やA20～23に比べ平坦でやや高台になっていたと考えられ居住に適した土地であったと思われる。また当時すでに埋没して湿地になっていたと思われる河川跡を開田して生計を立てていたことは、水田出土の山茶碗と遺構出土のものの年代が一致することからも予想される。

以上のように高見地区では、縄文時代・中世の人々がともに周囲の環境を巧みに利用した生活を行っていたと考えられる。今後の発掘によりこのことがさらに明らかになることを期待したい。

第2表　縄文土器観察表

図版No	出土地区	層位	時期	分類	色調	胎土	調整（施文）	装飾属性	口縁部形態	備考
1	SB1	1	Ⅱ	1a	明褐	密 径3mm以下のチャート、石英・金雲母少	RL（縦）	頸部沈線、充填縄文帯	面取り、円孔刺突をもつ突起	
2	SB1	1	Ⅱ	1a	にぶい黄褐	やや粗 径5mm以下のレキ多	LR（横）	2状沈線による充填縄文帯	面取り	
3	SB1	1	Ⅱ	1a	にぶい黄褐	やや粗 径5mm以下の赤褐色砂粒多		頸部沈線		輪積痕
4	SB1	1	Ⅱ	2a	浅黄	やや粗 径1mm以下の白色砂粒やや多	LR	横位縄文帯	面取り	
5	SB1	1	Ⅱ	1c	灰黄褐	やや粗 径2mm以下の砂粒やや多			口唇部沈線、突起	
6	SB1	1	Ⅱ	1c	黄褐	やや粗 径3mm以下のチャート等		縦位沈線間に円孔刺突	拡張、沈線	
7	SB1	1	Ⅱ		明褐	やや密 径1mm以下の石英・金雲母多	RL	頸部2条沈線、胴部縄文		
8	SB1	1	Ⅱ		明赤褐	やや粗 径1mm以下のチャート・石英・金雲母多	LR（横）	頸部2条沈線、胴部縄文		
9	SB1	1	Ⅱ	2a	灰白	密	LR（横）	沈線間磨消		
10	SB1	1	Ⅱ	4b	にぶい黄褐	やや粗 径1mm以下の砂粒やや多	LR	曲走する磨消縄文帯		
11	SB1	1	Ⅱ	2b	灰白	密 径3mm以下の砂粒少	丁寧なナデ（内面）	2条沈線による区画	2箇所の摘み	
12	SB1	1	Ⅱ	2a	灰白	密 径3mm以下の砂粒多		2条沈線によるクランク文様		
13	SB1	1	Ⅱ	4b	黄橙	やや粗 径3mm以下のチャート多	RL	縦位縄文帯		
14	SB1	1	Ⅱ	5a	明褐	やや粗 径2mm以下の砂粒少		断面三角形の高い隆帯、串状の工具による刺突		
15	SB1	1	Ⅱ	11	灰白	密	LR、丁寧なナデ（内面）	口縁部下に沈線		浅鉢？
16	SB1	1	Ⅰ	1	浅黄	やや密 径1mm以下の石英・角閃石少	斜方向のナデ（外面）	貝殻刺突、爪形隆帯（内面）	面取り	浅鉢
17	SB1	1		11	にぶい黄橙	やや密 白色粒やや多		U字状の沈線文		浅鉢
18	SB1	1		12a	浅黄	密 径1mm以下のチャート少			口唇部摘み	
19	SB1	1	Ⅱ	12	灰白	密 径3～5mmのチャート・石英レキ少	オオバコ圧痕			
20	SB1	1		12a	橙	密 径2mm以下のチャート・石英やや少	磨き			
21	SB1	1		12a	橙	密 径2mm以下の石英・チャートやや多				
22	SB1	1	Ⅱ		にぶい黄橙	密 径2mm以下の砂粒やや少	RL			1類の底部か？
23	SB1	1		13	明黄褐	やや粗 径1mm以下の砂粒多、金雲母・石英少				
24	SB1	1		12c	明黄褐	密 径2mm以下のチャート多、石英少		擦痕状		
29	SB2	1	Ⅰ	2	灰白	やや粗 径2mm以下の砂粒、石英		隆帯に沿う沈線、空間に擦痕状		
30	SB2	1	Ⅰ	2	浅黄橙	やや粗 径1mm以下の砂粒多、チャート		隆帯に沿う沈線、空間に擦痕状		
31	SB2	1	Ⅰ	2	浅黄	粗 径1mm以下の砂粒、石英・金雲母		隆帯文		
32	SB2	1	Ⅰ	3	浅黄橙	密 径1mm以下の砂粒やや多、石英		肥厚部に弧状沈線		
33	SB2	1	Ⅰ	3	にぶい橙	密 径1mm以下の砂粒、石英		弧状沈線、擦痕状		
34	SB2	1	Ⅰ	3	にぶい橙	密 径1mm以下の砂粒、金雲母・石英		縦位扇状沈線、擦痕状		
35	SB2	1	Ⅰ	3	灰白	密 径1mm以下の砂粒多、チャート		沈線間に半截竹管による連続刺突、空間に擦痕状		
36	SB2	1	Ⅰ	3	にぶい黄橙	やや密 径1mm以下の砂粒やや多		弧状沈線		
37	SB2	1	Ⅰ	3	にぶい黄橙	やや密 径1mm以下の砂粒やや多		弧状沈線		
38	SB2	1	Ⅰ	4	灰白	やや粗 径1mm以下の砂粒多、石英・金雲母・チャート				
39	SB2	1	Ⅰ	2	橙	やや粗 径2mm以下の砂粒やや多、チャート	無節L	隆帯に沿う沈線、空間に縄文	内面に拡張して面取り	
40	SB2	1	Ⅰ	3	にぶい黄橙	やや粗 径2mm以下の砂粒多、石英・金雲母・チャート	LR縄文	縦位2条沈線		
41	SB2	2	Ⅰ	3	浅黄橙	やや密 径2mm以下の砂粒多、チャート多・石英少	無節L	沈線文		
42	SB2	1		4	にぶい黄橙	やや密 石英・金雲母・角閃石		2条の平行沈線による区画、内部に刺突		
43	SB2	1	Ⅰ	2?	灰白	やや密 径2mm以下の砂粒、石英・金雲母		横位隆帯状に刺突、粘土紐による区画、擦痕状		44と同一個体？
44	SB2	1	Ⅰ	2?	灰白	やや密 径2mm以下の砂粒、石英・金雲母		粘土紐による楕円形区画、擦痕状		
45	SB2	1		4	明黄褐	密 径2mm以下の砂粒多、石英・雲母	擦痕状			
46	SB2	1	Ⅰ	4	にぶい黄橙	やや密 径1mm以下の砂粒、金雲母			折り返し口縁	
47	SB2	1	Ⅰ	5	黄橙	密 径1mm以下の砂粒、チャート・石英・金雲母				
48	SB2	2	Ⅰ	5	橙	粗 径2mm以下の砂粒、チャート				
57	SK26	1	Ⅱ	2a	浅黄	密 径5mm以下の砂粒・レキ	RL	幅広の縄文帯（頸部上）、クランク状沈線（頸部下）	大型突起（環状？）	
58	SK26	1	Ⅱ	1d	にぶい黄橙	やや密 径1mm以下の砂粒		3条沈線		
59	SK26	1	Ⅱ	1d	灰黄褐	やや密 径1mm以下の砂粒		3条沈線		
60	SK26	1		12a	にぶい黄橙	密 径1mm以下の砂粒、石英	磨き			
61	SK28	2	Ⅱ	1d	浅黄	やや粗 径3mm以下の砂粒		口縁部沈線	拡張（内面）	
62	SK28	2	Ⅱ	1d	灰	密	磨き		拡張	
63	SK28	1	Ⅱ	1d	灰白	やや粗 径5mm以下のレキ・砂粒	磨き	口縁部沈線	拡張（粘土紐貼り付け）	
64	SK28		Ⅱ		にぶい黄橙	やや粗 径3mm以下の砂粒		沈線文	摘み	
65	SK28	2	Ⅱ		にぶい黄橙	粗		弧状沈線		突起
66	SK28	2	Ⅱ	11	浅黄	密 径3mm以下の砂粒		沈線加飾		中空突起、浅鉢
67	SK28	2	Ⅱ		にぶい黄橙	やや粗 径3mm以下の砂粒、金雲母多			面取り	71と同一個体
68	SK28	2	Ⅱ	1b	にぶい橙	やや密	LR（縦）	2状沈線による曲走する磨消縄文帯		

図版No	出土地区	層位	時期	分類	色調	胎土	調整(施文)	文様構成	口縁部形態	備考
69	SK28	2	Ⅱ	1b	浅黄橙	やや粗 径3mm以下の石英・チャート		3条沈線による曲走する鋸歯		
70	SK28	1		12b	にぶい黄橙	やや密 石英・金雲母	LR			72と同一個体?
71	SK28	1・2		12c	にぶい黄橙	やや粗	磨き(内面)			
72	SK28	1	Ⅱ	1b	にぶい黄橙	やや密 径5mm以下のレキ・砂粒、石英・金雲母	無節L	3条沈線による曲走、2状沈線による縄文帯		
73	SK28	2	Ⅱ		赤褐	密 石英・金雲母	無節R	縦位沈線の片側のみ縄文充填		把手
74	SK28	2	Ⅱ		灰黄褐	やや密		沈線		把手
75	SK28	1		12c	橙	密 径2mm以下のチャート	撚糸			
86	SK8	1		13	にぶい黄橙	やや密 径2mm以下の砂粒、石英				
87	SK8	1	Ⅱ		にぶい黄橙	やや粗		沈線間に、円孔刺突		
88	SK15	1	Ⅱ	3d	橙	密 径1mm以下の砂粒、チャート		沈線区画、円孔刺突	T字型拡張	
89	P6	2		13	明赤褐	やや粗 径2mm以下の砂粒				
90	S11	1		13	にぶい黄橙	やや粗 径3mm以下の砂粒				
93	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	1	灰黄褐	やや粗 径1mm以下の砂粒	LR	口縁部下の沈線に刺突文、結節部にも刻み		鉢?
94	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3a	明赤褐	やや粗 径2mm以下の砂粒、チャート・石英		肥厚部に縦位の沈線	肥厚	
95	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	3a	浅黄橙	やや粗 径2mm以下の砂粒、チャート	RL(節)	結節部の上下に縦位の多条沈線文	肥厚	
96	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	1d	明赤褐	やや粗 径1mm以下の砂粒、石英			拡張(内面)	
97	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	1d	浅黄橙	やや密		刻み	拡張	
98	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	1d	橙	やや粗			波状口縁、拡張(沈線・縄文)	
99	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	にぶい黄橙	やや粗 2mm以下のチャート・雲母等		横位2条沈線	肥厚	
100	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	にぶい黄橙	やや密 径3mm以下の石英・雲母		横位沈線、縦位集合沈線、円孔刺突	肥厚、内面に粘土紐貼り付け	
101	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	3	橙	やや密 石英少	LR(節)	肥厚部に横位沈線、竹管刺突		
102	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3e	にぶい黄橙	やや密 径3mm以下のチャート等		円形	拡張(内面)、円形	
103	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3e	明黄褐	やや粗 径3mm以下のチャート等	RL?	円形	拡張、山形突起	
104	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3e	橙	やや粗 径3mm以下のチャート等多			拡張、円形、山形突起	
105	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3e	明黄褐	粗 径2mm以下のチャート等	RL	円形	T字型拡張、山形突起	
106	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	にぶい黄橙	密 径2mm以下の砂粒、チャート・石英・金雲母	磨き	拡張部に3状沈線	T字型拡張	
107	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	黒	やや粗 径3mm以下の砂粒少	LR(節)	縄文施文後、沈線区画	T字型拡張、波状口縁	
108	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	明褐	やや密 径3mm以下の砂粒、石英・金雲母	LR(節)	磨消縄文帯を区画状にする	T字型拡張、波状口縁	
109	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	にぶい黄橙	密 径4mm以下の砂粒・レキ、石英・金雲母	LR(節)	縄文施文後横位の4条沈線	波状口縁、T字型拡張	
110	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3d	にぶい黄橙	やや粗	LR(節)	多条沈線による縄文帯	拡張	

図版No	出土地区	層位	時期	分類	色調	胎土	調整(施文)	文様構成	口縁部形態	備考
111	遺物集中地点	3-①	Ⅱ		にぶい黄橙	やや粗 径2mm以下の砂粒		結節部上部に楕状等の沈線文		
112	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3b	橙	密		多条沈線文、3条沈線	L字型拡張	
113	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	3b	橙	密 径2mm以下の砂粒、石英・雲母		三角形と楕状をモチーフにした沈線文	波状口縁、L字型拡張	
114	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	4a	にぶい黄橙	やや粗 径2mm以下の砂粒		磨消縄文帯	面取り	
115	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	5	浅黄	密 径5mm以下の砂粒・レキ、チャート		磨消縄文帯?	面取り	
116	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	4a	暗褐	やや密 径1mm以下の砂粒、石英	LR	磨消縄文帯による区画	内面端部に沈線	
117	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	4a	暗褐	やや密 径1mm以下の砂粒、石英・雲母	LR	磨消縄文帯		116と同一個体
118	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	4a	黒褐	やや密 径1mm以下の砂粒、石英	LR(節)	磨消縄文帯による鋸歯		
119	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	5	褐	やや粗 雲母多	RL(節)	2条沈線による縄文帯		
120	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	4b	明褐	密	LR(節)	多条沈線による磨消縄文の1部?		
121	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	4a	暗褐	やや密 径1mm以下の砂粒、石英・雲母	RL	磨消縄文帯		
122	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	4a	灰黄褐	粗 径1mm以下の砂粒	LR(節)	縄文帯による区画		
123	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	4a	褐	密 径3mm以下の砂粒		直線的な沈線による三角形状モチーフ		
124	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	6a	にぶい褐	やや密 径1mm以下の砂粒、石英	磨き、LR(節)	多条沈線による磨消縄文帯	面取り、肥厚	
125	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	6a	黒褐	粗 径5mm以下の砂粒・レキ、チャート	LR(節)	多条沈線による磨消縄文帯		
126	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	6b	にぶい黄橙	やや粗	LR(節)	多条沈線による縄文帯	面取り、突起	
127	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	6b	浅黄橙	密 径3mm以下の砂粒多、チャート	LR(節)	磨消縄文帯による長楕円状区画	面取り、沈線	
128	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	7a	浅黄	粗 径5mm以下の砂粒・レキ		弧状沈線		
129	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	7a	にぶい橙	やや密		沈線による多重楕状文		
130	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	7b	にぶい黄橙	やや密		弧状沈線文		131と同一個体?
131	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	7b	にぶい黄橙	やや密		沈線による多重半円文等		
132	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	7b	灰黄褐	密 径2mm以下の砂粒		沈線による多重半円文等	面取り	
133	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	7c	にぶい黄橙	やや粗 径2mm以下の砂粒、石英		長楕円形の沈線文、沈線間刺突		
134	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	7c	灰黄褐	やや粗 径1mm以下の砂粒、石英	磨き	横位の鋸手状沈線		
135	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8a	暗褐	粗 径2mm以下の砂粒、チャート		隆帯起線による鋸歯	波状口縁	
136	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8a	浅黄橙	粗 径5mm以下の砂粒・レキ	RL?	横位隆帯起線		
137	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8a	浅黄橙	粗 径5mm以下の砂粒・レキ	RL	横位隆帯起線		136〜138同一個体
138	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8a	浅黄橙	粗 径5mm以下の砂粒・レキ	RL?	横位隆帯起線、竹管刺突を施す貼り付け		
139	遺物集中地点	3-①	Ⅱ	8a	にぶい黄橙	やや密		横位隆帯起線		
140	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8a	にぶい黄橙	粗 径2mm以下の砂粒		横位隆帯起線		
141	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8a	明褐	やや粗 径2mm以下の石英等		隆帯起線、刺突		
142	遺物集中地点	3-②	Ⅱ	8b	にぶい黄橙	やや粗		環状隆帯		

遺物No	出土地区	層位	時期	分類	色調	胎土	調整(縄文)	施文属性	口縁部調整	備考
143	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	8b	にぶい黄橙	やや密 径2mm以下の砂粒		縦羽状帯		
144	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	8c	橙	やや密 径3mm以下の砂粒	RL	横位有節縄帯、空間に縄文		
145	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	8c	黒褐	密 径1mm以下の砂粒		有節縄帯、円形刺文	面取り、内屈	
146	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	9	灰黄褐	やや密 径1mm以下の砂粒、金雲母		横位押引文	口縁部を折り返す	
147	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	9	暗灰黄	やや密 径2mm以下の砂粒、石英・金雲母		中空把手、鋸歯押引沈線		
148	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	褐灰	密 径1mm以下の砂粒、石英	磨き	沈線の沿う撚糸痕		黒色焼成
149	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	11	浅黄	密 石英・金雲母	磨き	沈線の沿う撚糸痕		黒色焼成
150	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	にぶい黄橙	やや密 2mm以下の石英	LR(縦)	肥厚部のみ縄文	肥厚	鉢
151	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	にぶい黄橙	密 径5mm以下の砂粒・レキ、チャート	LR(縦)	肥厚部のみ縄文	肥厚	鉢
152	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	11	浅黄橙	やや密 径2mm以下の砂粒・チャート		8字状モチーフとそれに沿う磨消縄文		鉢?
153	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	10a	にぶい黄橙	やや密 径3mm以下の砂粒、石英・金雲母	RL(縦)		面取りして縄文を施す	
154	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	10a	灰黄	やや密 径5mm以下の砂粒・レキ、石英・金雲母	RL(縦)		面取りして縄文を施す	
155	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	10	にぶい黄橙	密 径1mm以下の砂粒	LR(縦)	口縁内面端部に横位磨消縄文帯		
156	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	10b	にぶい黄橙	やや密 径3mm以下の砂粒				
157	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	明赤褐	やや密 径3mm以下の砂粒				
158	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	暗灰黄	やや密 径1mm以下の砂粒、金雲母	LR(縦)	多条沈線による磨消縄文帯	面取り	浅鉢?
159	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	黒褐	やや密 径2mm以下の砂粒	LR(縦)	多条沈線による磨消縄文帯		浅鉢?
160	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	にぶい黄橙	密 径2mm以下の砂粒、石英	LR(縦)	多条沈線による磨消縄文帯		浅鉢?
161	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	11	灰黄	やや密 径1mm以下の砂粒、石英・金雲母	LR(縦)	幅広の横位磨消縄文帯		鉢または浅鉢か?
162	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	橙	やや密 径3mm以下の砂粒、チャート少	RL(縦)	幅の広い磨消縄文帯		鉢または浅鉢?
163	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	灰白	やや密	LR	磨消縄文	内折	鉢?
164	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	黒褐	やや密	LR(縦)	内面多条沈線による磨消縄文帯		浅鉢
165	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	にぶい黄橙	密 径1mm以下の砂粒、チャート・石英	磨き		面取り、屈み(内面)	浅鉢
166	遺物集中地点	3-②	Ⅰ	11	灰黄褐	やや密 径1mm以下の砂粒、金雲母	LR(縦)、磨き	屈曲部上端に縄文を施す		黒色焼成
167	遺物集中地点	3-①	Ⅰ	11	浅黄橙	やや密	磨き			黒色焼成
168	遺物集中地点	3-②		12b	灰黄褐	やや密 径3mm以下の砂粒、石英	LR			
169	遺物集中地点	3-②		12b	にぶい黄橙	やや密 径1mm以下の砂粒・石英	LR			
170	遺物集中地点	3-②		12a	橙	密 径5mm以下の砂粒・レキ、チャート	削り			
171	遺物集中地点	3-②		12	にぶい橙	密 径1mm以下の砂粒、チャート			屈み	
172	遺物集中地点	3-②		12c	にぶい黄橙	やや密 径2mm以下の砂粒		条線文(3単位?)		
173	遺物集中地点	3-②		12	にぶい黄橙	やや密 径3mm以下の砂粒、チャート・石英	RL	撚糸痕2種、縄文		

遺物No	出土地区	層位	時期	分類	色調	胎土	調整(縄文)	施文属性	口縁部調整	備考
174	遺物集中地点	3-②		12c	明赤褐	密 径2mm以下のチャート等	撚糸			
175	遺物集中地点	3-②		12c	にぶい黄橙	密 径4mm以下の砂粒・レキ、チャート		撚糸痕		
176	遺物集中地点	3-①		13	にぶい橙	やや密 径2mm以下のチャート等				底部網代痕
177	遺物集中地点	3-②		13	にぶい黄橙	やや密 径5mm以下の砂粒・レキ、石英				底部網代痕
178	遺物集中地点	3-②		13	浅黄橙	粗 径5mm以下の砂粒・レキ				底部網代痕
179	遺物集中地点	3-②		13	浅黄橙	やや粗 径2mm以下の砂粒、石英				底部網代痕
180	遺物集中地点	3-①		13	にぶい赤褐	やや粗 径2mm以下の砂粒、チャート・石英				底部網代痕
181	NR2	1	Ⅱ	8c	黒褐	粗 径1mm以下の石英多		有節縄帯、8字状貼り付け	面取り、内折	
182	NR1	1	Ⅱ	11	灰黄褐	粗 径2mm以下の砂粒、石英		多状沈線による磨消縄文帯(内面)		浅鉢
183	NR1	2			浅黄橙	やや密 径2mm以下の砂粒、石英		ヘラ状の工具による多段化した押引文		
184	NR1	1	Ⅱ	7b	橙	やや粗 径1mm以下の砂粒、チャート		沈線による多重円文		
185	NR1	1	Ⅱ	6b	浅黄	密 径5mm以下の砂粒・レキ、雲母	LR(縦)	多条沈線による磨消縄文	面取り	
186	NR1	2	Ⅱ	7b	浅黄	粗 径3mm以下の砂粒		多条沈線による鋸歯		

第３表　石鏃観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	脚長(cm)	重さ(g)	形態	欠損部	備考
75	SB1	1	チャート	2.4	(1.7)	0.4		1.7	1A	基部	
	SB2	1	チャート	2.4	(1.5)	0.4	0.3	1.3	2B	基部	
	SB2	1	チャート	(2.2)	(1.6)	0.4		1.3	2B	基部	
49	SB2	1	チャート	2.7	(1.9)	0.4	0.3	2.3	2B	基部	
50	SB2	1	下呂石	(1.7)	1.5	0.3	0.1	0.8	1B	先端部	
77	SK28	2	チャート	1.9	(1.5)	0.5	0	1.1	1D	基部	
	SK27	2	チャート	1.9	(0.8)	0.2	0.5	0.4	3	平脚	鋸歯状側縁
	SK30	1	チャート	2.0	1.3	0.3	0.5	0.3	1C		鋸歯状側縁
189	遺物集中地点 3－①		チャート	2.7	(1.7)	0.3	0.4	1.4	2C	基部	
	SK32	1	チャート	(1.1)	1.7	0.3	0.4	0.7	1C	先端部・基部	
	NR2	2	流紋岩	2.7	1.4	0.3	0	0.3	1D		鋸歯状側縁
	A19	2	チャート	1.7	1.1	0.3	0.1	0.8	3B		
	A17	2	チャート	1.7	1.4	0.3	0.1	0.8	1C		鋸歯状側縁
	A21－⑥	1－⑥	下呂石	1.5	1.1	0.2	0.4	0.4	1C	基部	
	A22－⑤	1－⑤	下呂石	(1.0)	1.2	0.2	0.4	0.2	1C	先端部	
	A21	1－⑥	チャート	2.4	1.8	0.4		2.1			未製品
	A21～23	1－⑥	チャート	1.5	(1.0)	0.2	0.3	0.3	1A	基部	鋸歯状側縁
	A23	1－⑤	チャート	(2.3)	1.7	0.3		0.3	3	基部	鋸歯状側縁
	A17	1－⑤	チャート	1.6	1.5	0.3	0	1.1	1D		
	A16	1－⑤	チャート	1.7	1.2	0.3	0	0.9	3E		
	A23	1－⑤	チャート	(1.5)	(1.1)	0.3		0.8	3E	基部	未製品
	A17	1－⑤	チャート	1.5	1.0	0.3	0.3	0.4	1C		

第４表　削器・掻器観察表

図版	遺構	層位	種別	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	刃縁	刃部形	備考
32	SB2	1	掻器	チャート	7.1	3.3	2.3	43.7	縦長	両側縁	節理面有り
33	SB2	1	削器	流紋岩	9.1	5.3	1.9	72.9	横長	両側縁	自然面有り
	SB2	1	削器	チャート	2.2	1.4	0.5	2.1		長側縁	節理面有り，ノッチ有り
	遺物集中地点	3－①	削器	チャート	3.8	2.2	0.8	5.4	横長	長側縁	
192	遺物集中地点	3－②	削器	流紋岩	5.7	5	1.7	64.2	縦長	両側縁	自然面有り，欠損
193	遺物集中地点	3－②	削器	サヌカイト？	5.6	2.7	0.6	17.8	縦長	両側縁	
194	遺物集中地点	3－②	削器	流紋岩	7.9	5.8	1.4	59.8	横長	半周	自然面有り
195	遺物集中地点	3－②	削器	流紋岩	9.1	6.6	1.4	64.8	横長	全周	自然面有り
196	遺物集中地点	3－②	削器	流紋岩	7.7	5.6	1.5	75.3	縦長	両側縁	自然面有り
	A22	1－⑥	削器	流紋岩	7.7	4.8	1.7	58.9	横長	長側縁	自然面有り
	A22	1－⑥	削器	チャート	4.5	3.2	1.1	17.2	横長	全周	
	A22	1－⑥	削器	チャート	4.2	3.3	0.8	10.9	横長	半周	
	A22	1－⑥	削器	流紋岩	4.1	2.8	0.6	9.4	横長	全周	
	A16	1－⑤	掻器	チャート	7.5	5.5	1.3	70.1	横長	長側縁	自然面有り
	A19	1－⑤	削器	チャート	5.4	3.6	1.1	20.6	横長	全周	
	A17	1－⑤	削器	チャート	2.9	1.3	0.3	2.5	縦長	全周	長破状剥片

第５表　石錘観察表

図版	遺構	層位	種別	石材	長軸(cm)	幅(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
82	SK28	1	切目1	砂岩	5	4.6	2.7	1	19.1	
	SK16	2	打ち欠き	砂岩	6.3	6.3	1.9	1.2	27.6	
209	遺物集中地点 3－②		打ち欠き	砂岩	3.7	3.6	3.1	0.8	12.1	
210	遺物集中地点 3－②		切目1	砂岩	5.3	5.1	4.3	1.2	35.5	
	A17	2	切目1	砂岩	7.4	7.1	6.8	2	137.3	
	A18	2	切目1	砂岩	6.8	6.7	2.8	1.6	57.4	
	A18	2	打ち欠き	流紋岩	7.3	6.8	5.8	1.9	121	

第６表　石核観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
81	SB2	1	流紋岩	4.1	3.4	1.3	18.7	2
	SB2	1	チャート	3.1	1.8	1.3	8.3	3
	SB2	1	チャート	3.2	2.1	1.1	10.9	1 節理面有り
	SK28	1	チャート	3.1	1.8	1.1	13.6	1 節理面有り
213	NR2	2	流紋岩	10.8	10.5	6.3		4
	遺物集中地点 3－①		流紋岩	5.9	4.9	1.5	79.3	5
	遺物集中地点 3－②		下呂石	4.2	3.8	1.9	18.7	2
	遺物集中地点 3－②		流紋岩	7.5	6.7	2.8	154.4	4
	遺物集中地点 3－②		チャート	2.2	1.9	0.9	4.2	節理面有り
	遺物集中地点 3－②		チャート	6.2	5.2	2.8	94.8	2 自然面有り
	A20	1－⑥	チャート	2.6	2.7	1.2	11.3	1 節理面有り
	A20	1－⑥	チャート	4	3.1	1.1	21.6	2 節理面有り
	A11	1－⑥	流紋岩	7.3	5.6	2.3	102.6	2 自然面有り

第７表　楔形石器観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
75	SK28	1	チャート	2.9	2	0.8	4.5	
189	NR2	2	チャート	2.7	1.4	0.8	1.6	
190	遺物集中地点 3－②		チャート	2.1	2.2	0.7	3.7	
	A22	1－⑥	チャート	2.4	1.3	0.4	1.1	
	A20	2	チャート	1.5	1.6	0.4	2	
	A21	1－⑥	チャート	2.1	2	1.1	3.3	
	A21	1－⑥	流紋岩	3.1	1.4	1.7	8.3	
188	遺物集中地点 3－②		下呂石	2.9	1.4	0.9	2.4	
	A21	1－⑥	流紋岩	3.2	1.6	1.4	7.9	
	表採		下呂石	1.8	1.4	0.6	2.3	
	A16	1－⑤	チャート	2.2	2.4	0.6	5.7	
	A19	1－⑤	チャート	2.5	1.8	0.8	13	
	A19	1－⑤	チャート	2	1.7	0.6	2.6	

第８表　石錐観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
78	SK28	1	チャート	1.8	0.8	0.3	0.3	

第９表　磨製石斧観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
	SK26	1	片岩	7.7	4.4	2.01	105.9	

第10表　凹石観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
212	NR1	2	凝灰岩	9.8	7.3	4.3		両面に凹み

第11表　打製石斧観察表

図版	遺構	層位	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚(cm)	重量(g)	頭	刃縁	備考
28	SB1	1	流紋岩	(10.2)	5.3	1.9	155.5	A	刃部	自然面有り
	SB1	2	凝灰岩	10.0	5.3	2	114.4	A	基部	自然面有り
34	SB2	2	流紋岩	8.2	4.4	1.8	66.8	A		自然面有り
83	SK28	1	砂岩	13.2	5.3	2.4	251.7	A		自然面有り
84	SK28	2	砂岩	12.1	4.4	1.9	120.3	B	刃部 基部	自然面有り、 非熱
	SK28	1	砂岩	12.6	5.2	2	184.5	B		自然面有り
	P16	1	流紋岩	15.9	5.6	2.5	210.1	A		自然面有り
	SK171	1	凝灰岩	(6.3)	4	2	58.9	A	刃部	
	SK6	1	凝灰岩	10.7	5.5	1.9	105.6	A		
	SK17	1－③	凝灰岩	(7.3)	4.7	1.4	69.2		基部	自然面有り、 非熱
198	遺物集中地点	3－②	流紋岩	15.7	5.4	3.1	307.3	A		自然面有り
199	NR2	2	流紋岩	14.8	5.3	3.3	209.5	A		自然面有り
200	NR1	4	流紋岩	(12.8)	4.9	1.8	148.9	B	基部	自然面有り
201	NR2	2	砂岩	12.7	4.9	3.1	276.1	A		自然面有り
202	遺物集中地点	3－②	流紋岩	11.3	5.8	2.1	162.3	A		自然面有り、 基部抉り、バチ型
203	NR2	2	流紋岩	8.7	4.3	2.1	102.8	A		
204	遺物集中地点	3－②	結晶片岩	(6.1)	3.7	0.7	18.9		刃部	
205	NR2	1	凝灰岩	(6.5)	4.7	1.7	72.1		刃部	自然面1部残存、基部抉り
206	遺物集中地点	3－②	流紋岩	13.8	4.6	2.8	165.4			自然面有り
207	遺物集中地点	3－②	砂岩	(9.0)	5.2	1.4		A	基部	自然面有り
208	遺物集中地点	3－②	変岩	11.5	5.6	2.5	164.5	A		自然面有り、 基部抉り
	NR2	1	凝灰岩	12.6	5	2.6	218	A		自然面有り
	NR2	2	流紋岩	(10.9)	4.3	1.9	108.9	A	基部	自然面有り
	NR2	2	凝灰岩	13.3	5.7	2.8	346.2	A		自然面有り
	NR2	2	砂岩	12.0	5	3.3	361.3	A		自然面有り
	NR2	2	砂岩	(12.1)	5.4	2.9	345.2	B	基部	自然面有り
	NR1	4	凝灰岩	(9.3)	5.3	1.4	114		刃部	自然面有り
	NR1	4	凝灰岩	(7.3)	4.7	2.2	101.7	A	基部	自然面有り
	NR2	2	砂岩	12.5	4.9	3.1	162.8	A		自然面有り
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	11.9	4.6	2.6	172.5	A		
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	8.5	5.1	1.4	64.6	A	基部	
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	11.4	4.8	2.4	121.6	A		
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	(12.4)	6.2	2.8	274.8		刃部・基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	砂岩	(16.0)	6.4	2.4	442.3		刃部・基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	凝灰岩	12.2	4.8	2.2	160.2	A	基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	凝灰岩	10.9	6.4	2.2	246.4	A		自然面有り
	遺物集中地点	3－②	ホルンフェルス	(9.2)	6.1	1.7	111.1	A	基部	自然面有り、バチ型
	遺物集中地点	3－①	凝灰岩	12.5	4.8	1.7	128.8	A		自然面有り
	遺物集中地点	3－①	凝灰岩	(7.6)	4.7	1.7	84.9	A	基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	12.0	5.1	2.3	171.7	A	基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	凝灰岩	(7.5)	4.4	1.7	70.7		刃部・基部	
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	10.7	4.4	1.7	100.5	A		自然面有り
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	10.3	4.9	2.2	132.4	A		
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	(8.8)	5.7	1.6	111		刃部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	流紋岩	12.2	5.1	1.9	124.3	A	基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	砂岩	(7.4)	5.7	3.8	130.1	A	基部	自然面有り
	遺物集中地点	3－②	砂岩	(9.2)	5.1	1.3	91.9		刃部	自然面有り
	A19	2	流紋岩	12.3	6	2.6	209.3	A		自然面有り
	A16	1－③	砂岩	(6.9)	5.9	1.9	115.1		刃部	自然面有り
	A20	1－③	砂岩	(8.3)	4.6	1.1	56		刃部	自然面有り
	A19	1－③	砂岩	(8.5)	5.6	1.2	82.9		刃部・基部	自然面有り
	A22	1－⑥	砂岩	(4.8)	6.2	1.6	80.5		刃部・基部	自然面有り、非熱
	A23	1－⑥	流紋岩	(6.2)	5.5	1.9	68.4	A	基部	非熱
	A21	1－①	凝灰岩	(7.4)	4.2	1.5	101.7	A	基部	自然面有り
	A17	1－③	流紋岩	11	4.4	2.1	124.2	A	基部	自然面有り
	A23	1－①	凝灰岩	(5.2)	5.8	0.9	33.6		刃部	自然面有り
	A20	1－⑥	流紋岩	(6.4)	5.8	1.1	41.9		刃部	
	A20	1－⑥	流紋岩	(7.2)	4.8	1.8	82.7	A	基部	
	A20	1－⑥	流紋岩	(9.3)	4.8	2.4	143.7	A	基部	自然面有り
	A20	1－⑥	凝灰岩	(10.3)	5.4	2.6	190.3		刃部	
	A16	2	凝灰岩	10.6	4.9	2.1	136.5	A	基部	自然面有り
	A20	1－⑥	砂岩	9.9	4.4	1.4	98.9	A	基部	自然面有り

第12表　叩き石・敲き石・磨石観察表

図版	遺構	層位	種別	石材	長軸(cm)	短軸(cm)	厚(cm)	重量(g)	組成	敲打痕	備考
33	SB2	1	磨石	砂岩	6.4	4.8	3.8	196.2		側縁	欠損
81	SK28	1	敲石	凝灰岩	(5.9)	3.5	3.5	119.6	先端	側縁	平坦面に敲痕有り
	SK4	1	敲石	凝灰岩	5.4	4.1	3	113.2	先端		非熱
211	遺物集中地点	3－②	叩石	流紋岩	(7.6)	4.2	2.5	135.6	先端		欠損
	A22	1－⑥	敲石	砂岩	5.3	4	3.5	149.2	両端		
	A17	1－③	敲石	凝灰岩	12.2	8.3	5.4		両端	両面	非熱

注

1・2）ヘラ型石器の定義及び名称、石核については『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』（佐野他　1991）の分類を参考にしている。

3）叩石・敲石の区別及び名称は『飛瀬・底津遺跡』（佐野　1995）による。

4）「岐阜県宮川下流域の打製石斧」（林他　1996）の「分析」において、「全長や刃部幅に差異がみられても、基部幅にはさしたる違いはない」ことから、「木柄への装着と関わる現象」という結論が齊藤基生氏の指摘として述べられている。

5）工藤俊樹氏は『鳴鹿手島遺跡』（工藤他　1988）の中で、第13群土器に先行する土器群として上河北遺跡と浜島遺跡を掲げており、木下氏はこれをもとに浜島遺跡と上茜生田遺跡の土器を検討して浜島遺跡→上茜生田遺跡→鳴鹿手島遺跡の変遷を示唆している（木下　1993）。本遺跡出土の３類ｄ種の土器群はこの内上茜生田遺跡の遺物に類似するものがみられる。また上茜生田遺跡は、岐阜県境の山間部に位置するため本遺跡とも比較的近い距離にあり、時期的だけでなく地域的な繋がりも考えることができるであろう。

6）口縁肥厚部と胴部に縄文を施文し、胴部が強く張る鉢型土器を指す。本遺跡出土のものは口縁部のみであるため同一の器種・器形になるかは不明である。

参考文献

泉　拓良　1981　「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣

泉　拓良・玉田芳英　1986　「文様系統論―縁帯文土器―」『季刊考古学』第17号　雄山閣

泉　拓良　1989　「縁帯文土器様式」『縄文土器大観』４　小学館

大野市教育委員会　1985　『右近次郎遺跡』Ⅱ　大野市文化財報告書第３冊

木下哲夫　1993　「気屋式以後（１）北陸に於ける堀之内２式相当の土器型式について（予察）」『先史考古学研究』第４号

（財）岐阜県文化財保護センター　1991　『宮下遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センター　1991　『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センター　1991　『戸入村平遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センター　1993　『荒城神社遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センター　1995　『西乙原遺跡　勝更白山神社遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センター　1995　『飛瀬・底津遺跡』

市立市川考古博物館　1992　『堀之内貝塚資料図譜』　同博物館研究調査報告　第５冊

戸田哲也　1993　「飛騨を中心とした縄文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第４号

西田泰民　1989　「堀之内・加曽利Ｂ土器様式」『縄文土器大観』４　小学館

林　直樹他　1996　「岐阜県宮川下流域の打製石斧」『斐陀』第４号

福井県教育庁文化財調査センター　1988　『鳴鹿手島遺跡』

平安博物館　1975　『桑飼下遺跡』

洞戸村史編集委員会　1988　『洞戸村史』上巻

遺跡遠景（北から）

SB 1 完掘状況（南から）

SB 1 層位（南西から）

SB 2 完掘状況（西から）

SB 2 層位（北から）

図版2

SK26完掘状況（東から）

SK28完掘状況（南から）

SK28層位（北西から）

SK15完掘状況（南から）

SI 1 検出状況（北西から）

NR 1 完掘状況（北西から）

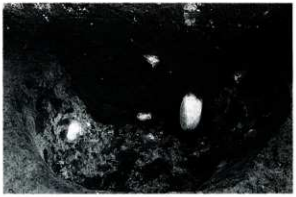
SI 2 層位（北西から）

遺物集中地点層位（北西から）

NR 2 完掘状況（南から）

SK16・20完掘状況（北西から）
手前：SK16　奥：SK20

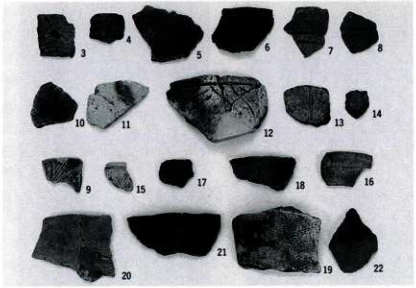
SK13完掘状況（西から）



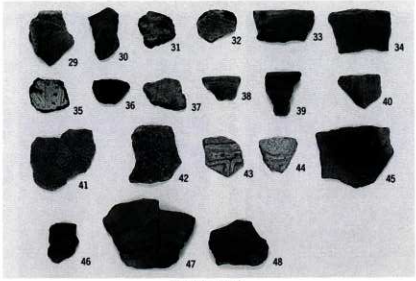
SK18完掘状況（西から）

SK14完掘状況（北西から）

SK17完掘状況（南西から）



SB 1 出土土器(1)



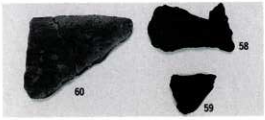
SB 2 出土土器

SB 1 出土土器(2)

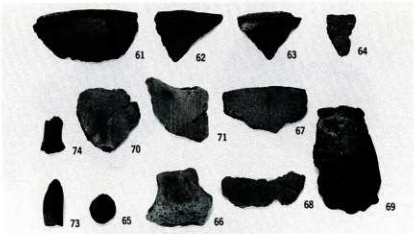
SB 1 出土土器(3)

SB 1 出土土器(4)

SK26出土土器(1)



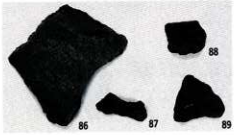
SK26出土土器(2)



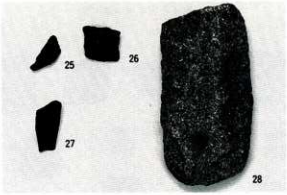
SK28出土土器(1)

SK28出土土器(2)

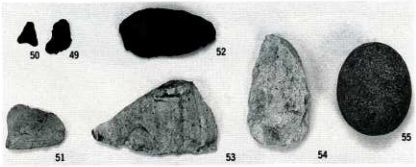
SK28出土土器(3)



SK 8 ・15、P 6 出土遺物



SB 1 出土石器

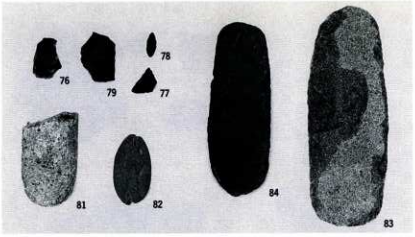


SB 2 出土石器

SB 2 出土石皿

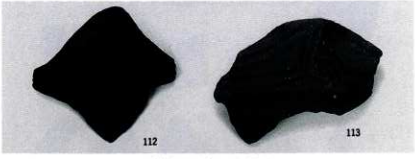
SK26出土磨製石斧

図版 5

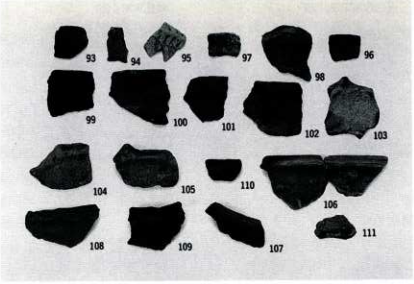


SK28出土石器

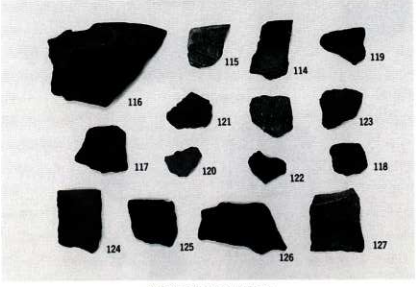
SI 1 出土石皿



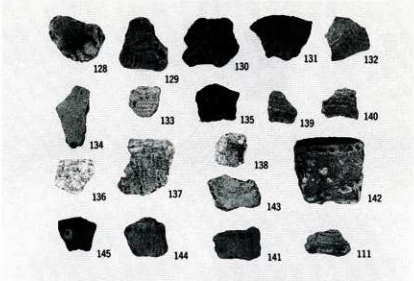
遺物出土地点出土土器(1)



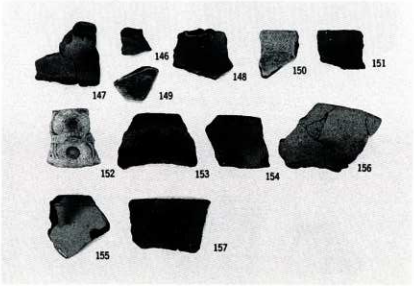
遺物集中地点出土土器(2)



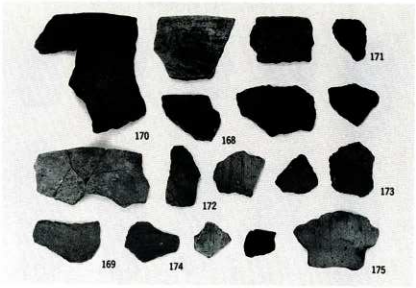
遺物集中地点出土土器(3)



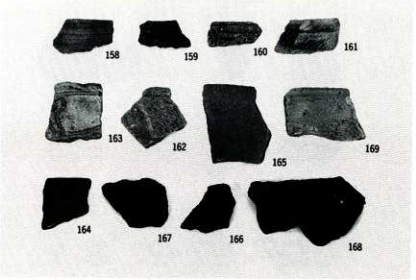
遺物集中地点出土土器(4)



遺物集中地点出土土器(5)

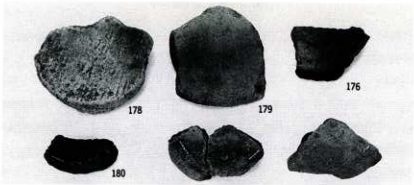


遺物集中地点出土土器(6)

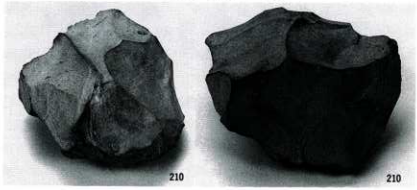


遺物集中地点出土土器(7)

図版7

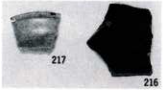


遺物集中地点出土土器(8)

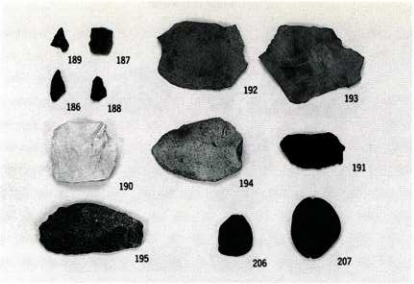


NR 1 出土石核

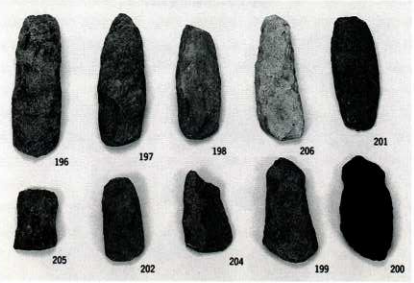
中世遺構出土遺物(1)



中世遺構出土遺物(2)



遺物集中地点出土石器(1)



遺物集中地点出土石器(2)

報告書抄録

ふりがな	こうみいせき
書名	**高見遺跡**
副書名	一般国道256号道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	長谷川幸志
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター
所在地	〒500-8708　岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）Tel058(264)1111(814)
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
こうみ 高見遺跡	ぎふけんむぎぐん 岐阜県武儀郡 とのとむら 洞戸村大字奥 洞戸字田中森	21461	01192	35° 38′ 28″	136° 49′ 26″	19971001 ～ 19971205	240㎡	一般国道256号道路改良事業に伴う。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高見遺跡	集落跡	縄文時代 中期前葉 ～ 後期前葉 中世	住居跡 土坑 集石 柱穴・土坑	縄文土器・石器 （中期前葉・末葉 後期前葉） 山茶碗・大窯 古瀬戸	崩落堆積層より縄文時代後期前葉の良好な資料が出土している。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第40集

高　見　遺　跡

一般国道256号道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書

1998年３月25日　印刷
1998年３月31日　刊行

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）
印　　刷　西濃印刷株式会社